



**MERCURY
LOADRUNNER™**

VERSION 8.1

イ ン ス ト ー ル ・ ガ イ ド

MERCURY™

Mercury LoadRunner™

インストール・ガイド

Version 8.1

Mercury LoadRunner インストール・ガイド, Version 8.1

本マニュアル, 付属するソフトウェアおよびその他の文書の著作権は, 米国および国際著作権法によって保護されており, それらに付随する使用契約書の内容に則する範囲内で使用できます。Mercury Interactive Corporation のソフトウェア, その他の製品およびサービスの機範次の 1 つまたはそれ以上の特許に記述があります。米国特許番号 5,511,185; 5,657,438; 5,701,139; 5,870,559; 5,958,008; 5,974,572; 6,137,782; 6,138,157; 6,144,962; 6,205,122; 6,237,006; 6,341,310; 6,360,332, 6,449,739; 6,470,383; 6,477,483; 6,549,944; 6,560,564; 6,564,342; 6,587,969; 6,631,408; 6,631,411; 6,633,912; 6,694,288; 6,738,813; 6,738,933; 6,754,701; 6,792,460 および 6,810,494。オーストラリア特許番号 763468 および 762554。その他の特許は米国およびその他の国で請中です。権利はすべて弊社に帰属します。

Mercury, Mercury Interactive, Mercury のロゴ, Mercury Interactive のロゴ, LoadRunner, WinRunner, SiteScope および TestDirector は, Mercury Interactive Corporation の商標であり, 特定の司法管轄内において登録されている場合があります。上記の一覧に含まれていない商標についても, Mercury が当該商標の知的所有権を放棄するものではありません。

その他の企業名, ブランド名, 製品名の商標および登録商標は, 各所有者に帰属します。Mercury は, どの商標がどの企業または組織の所有に属するかを明記する責任を負いません。

Mercury Interactive Corporation
379 North Whisman Road
Mountain View, CA 94043
Tel: (650) 603-5200
Toll Free: (800) TEST-911
Customer Support: (877) TEST-HLP
Fax: (650) 603-5300

© 1994 - 2005 Mercury Interactive Corporation, All rights reserved

本書に関するご意見, ご要望は documentation@mercury.com まで電子メールにてお送りください。

目次

インストールの前に	v
LoadRunner パッケージ内容の確認	v
LoadRunner および Japanese User Interface Pack インストール CD の設定手順について	vi
設定手順について	vi
用語	vii
本書の表記規則	vii
第 1 部 : Windows へのインストール	1
第 1 章 Windows でのインストールについて	3
Windows での動作環境	4
診断ハードウェアの要件	5
第 2 章 お使いのコンピュータへの LoadRunner のインストール	7
LoadRunner のインストールの種類	7
インストール方法	8
LoadRunner のインストールの完了	21
カスタム・インストールのオプション	22
アンインストール・プログラムの実行	24
第 3 章 LoadRunner コンポーネントの追加	27
第 4 章 ライセンスの表示と変更	31
ライセンス情報の表示	31
ライセンスの変更	34
トラブルシューティング	35
第 5 章 LoadRunner のサンプルのインストール	37
LoadRunner サンプルについて	37
セットアップ・プログラム	38
サンプルのセットアップの手順	39
Corba および RMI 用の Readme ファイルへのアクセス	43

第 2 部 : UNIX へのインストール	45
第 6 章 UNIX へのインストールについて	47
UNIX へのインストール	47
動作環境	48
システム・リソース	49
プロセス・エントリを増やす	51
ファイル記述子を増やす	53
スワップ領域を増やす	55
診断用のハードウェア要件	57
第 7 章 UNIX への LoadRunner のインストール	59
環境の確認	59
複数のプラットフォームでの LoadRunner のインストール	59
インストール・プログラムの実行	60
CD-ROM からのインストール準備 (IBM のみ)	65
アンインストール・プログラムの実行	66
第 8 章 インストール後の作業	67
環境変数の設定	67
権限の確認	69
サンプルの .cshrc ファイルと .profile ファイル	69
第 9 章 インストールの検証	73
verify_generator テスト	73
verify_generator オプション	74
第 3 部 : チューニング・エージェントのインストールとアンインストール	75
第 10 章 チューニング・エージェント	77
インストール手順の実行によるチューニング・エージェントの インストール	77
ファイルのコピーによるチューニング・エージェントの インストール	78
チューニング・エージェントの特権の要件	79
チューニング・エージェントのアンインストール	100
索引	101

インストールの前に

Windows および UNIX システムを対象とした、Mercury の自動負荷テスト・ツールであり、実運用時向けのチューニング・ツールでもある Mercury LoadRunner をご利用いただきありがとうございます。本書には、LoadRunner をインストールする際に知っておかなければならないすべての項目が含まれています。LoadRunner のパッケージ内容、システム環境の条件、登録の手順とバックアップの手順、そしてセットアップ・プログラムの実行方法を説明します。

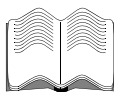
LoadRunner のインストールを始める前に、以下の作業を行ってください。

LoadRunner パッケージ内容の確認

LoadRunner のパッケージに次のものが含まれていることを確認してください。足りないものがある場合や壊れている場合は、Mercury または最寄りの代理店にご連絡ください。

CD-ROM

Windows Installation 2 枚 (Mercury LoadRunner 8.1 および Mercury LoadRunner 8.1 アドイン)、UNIX & Linux Installation 1 枚、および Japanese User Interface Pack 1 枚の計 3 枚が入っています。



マニュアル

LoadRunner には以下について説明するマニュアルが付属しています。

- ▶ LoadRunner のインストール方法
- ▶ 仮想ユーザ・スクリプトの作成方法
- ▶ LoadRunner コントローラおよびチューニング・コンソールの使用法
- ▶ 結果の分析方法
- ▶ サーバ・モニタの設定

負荷テスト・プロセスを順を追って説明するチュートリアルも含まれています。

LoadRunner および Japanese User Interface Pack インストール CD の設定手順について

LoadRunner インストール CD には、LoadRunner が日本語、英語、韓国語そして中国語のオペレーション・システムの Windows または UNIX 環境で動作するために必要なファイルがすべて含まれています。インストール後のユーザ・インタフェースおよびオンライン文書の使用言語は基本的に英語です。実際の設定手順は、LoadRunner を使ってテストする環境により異なります。

さらに、Japanese User Interface Pack CD には、ユーザ・インタフェース、およびオンライン文書を日本語で表示するためのファイルが含まれています。本ガイドではそれぞれの環境における LoadRunner のインストール手順に続き、Japanese User Interface Pack のインストール手順を説明します。

注：まず、LoadRunner インストール CD から LoadRunner プログラムをインストールした後に Japanese User Interface Pack CD から日本語のプログラム・ユーザ・インタフェースをインストールすることになります。

設定手順について

LoadRunner の CD-ROM には、LoadRunner をインストールするのに必要なすべてのファイルが含まれています。実際の設定手順は、LoadRunner を使ってテストする環境により異なります。

- ▶ **Windows マシン**だけで構成される環境の場合（コントローラ/コンソールとすべての仮想ユーザを Windows マシンで実行する場合）、本書の第 1 部で説明する設定手順に従ってください。

- ▶ **Windows と UNIX マシンの両方で構成される環境の場合は**、本書の第 1 部および第 2 部で説明する設定手順に従ってください。

テスト環境は ...	参照
Windows のみ	第 1 部
Windows と Unix	第 1 部および第 2 部

用語

仮想ユーザ	実際のユーザをエミュレートするユーザで、LoadRunner によって作成される。
ロード・ジェネレータ・マシン	LoadRunner の仮想ユーザをホストするワークステーション。
コントローラ・マシン	LoadRunner コントローラをホストするコンピュータ。
コンソール・マシン	Mercury チューニング・コンソールをホストするコンピュータ。
仮想ユーザ・グループ	共通の特性（動作する機種、使用するクライアントなど）を持つ仮想ユーザの集まり。

本書の表記規則

本書は、次の表記規則に従っています。

1, 2, 3	数字は操作手順を示します。
▶	ブリット記号はオプションまたは特徴を示します。
>	大なり記号はメニュー・レベルを区切ります（例：[ファイル] > [開く]）。
[太字]	アクションを実行する際のインタフェース要素の名前は、全角の大括弧に 太字 で示します（例：[実行] ボタンをクリックします）。

太字	メソッド名または関数名、メソッドや関数の引数、ファイル名、パスは、 太字 で示します。
Arial	使用例やユーザがそのまま入力しなければならない文字列は、 Arial フォントで示します。
<>	ファイル・パスまたは URL アドレスの中の可変部分は、山括弧で囲んで示します（例： <製品のインストール先フォルダ> %bin ）。
[]	省略可能な引数は、半角の大括弧で囲んで示します。
{ }	引数に割り当てる値の候補は、中括弧で囲んで示します。値をいずれか1つ割り当てる必要があります。
...	構文内の省略記号は、同じ形式で項目をさらに組み入れることができることを意味します。プログラム例での3つの点は、プログラム行が意図的に削除されていることを示します。
	2つの値のうちの1つを選択しなければならない場合、これらの値を垂直バーで区切ります。

第 1 部

Windows へのインストール

第 1 章

Windows でのインストールについて

LoadRunner の CD-ROM には、LoadRunner のコンポーネントのインストール手順を示すセットアップ・プログラムが含まれています。

セットアップ・プログラムを実行すると、LoadRunner がシングルユーザ・コンピュータのハードディスクにインストールされます。詳細については、第 2 章「お使いのコンピュータへの LoadRunner のインストール」を参照してください。

LoadRunner パッケージには、Windows CD-ROM が 2 枚含まれています。Mercury LoadRunner 8.1CD には、LoadRunner の完全インストールおよび仮想ユーザ・コンポーネントが含まれています。Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features CD には、LoadRunner 追加コンポーネントが含まれています。

LoadRunner の完全設定、仮想ユーザ・コンポーネント、サーバ・サイド・コンポーネントおよびアドインのインストールを選択できます。LoadRunner の完全設定を選択した場合は、標準構成またはカスタム構成を選択できます。カスタム構成を選択すれば、インストールする LoadRunner のコンポーネントを指定できます。

Windowsでの動作環境

LoadRunnerが正常に動作するには、少なくとも以下の環境が必要です。

システム要件	コントローラ とオンライン ・モニタ	コンソールと オンライン・ モニタ	仮想ユーザ・ ジェネレータ	仮想ユーザ	アナリシス・ モジュール
コンピュータ /プロセッサ	Pentium 350 MHZ 以上	Pentium 350 MHZ 以上	Pentium 350 MHZ 以上	Pentium 1 GHz 以上	Pentium 350 MHZ 以上
オペレーティ ング・ システム	<ul style="list-style-type: none"> Windows NT® サービス・パック 6a 以降 Windows 2000 サービス・パック 2 以降 Windows XP Professional サービス・パック 1 Windows 2003 	<ul style="list-style-type: none"> Windows NT® サービス・パック 6a 以降 Windows 2000 サービス・パック 2 以降 Windows XP Professional サービス・パック 1 Windows 2003 	<ul style="list-style-type: none"> Windows NT® サービス・パック 6a 以降 Windows 2000 サービス・パック 2 以降 Windows XP Professional サービス・パック 1 Windows 2003 	<ul style="list-style-type: none"> Windows NT® サービス・パック 6a 以降 Windows 2000 サービス・パック 2 以降 Windows XP Professional サービス・パック 1 Windows 2003 	<ul style="list-style-type: none"> Windows NT® サービス・パック 6a 以降 Windows 2000 サービス・パック 2 以降 Windows XP Professional サービス・パック 1 Windows 2003
メモリ	128 MB 以上	256 MB 以上	128 MB 以上	<ul style="list-style-type: none"> 非マルチスレッド仮想ユーザの場合は、最低 1 MB の RAM マルチスレッド仮想ユーザの場合は、最低 512 KB 	128 MB 以上
スワップ領域	合計物理メモ リの 2 倍	合計物理メモ リの 2 倍	合計物理メモ リの 2 倍	合計物理メモ リの 2 倍	合計物理メモ リの 2 倍

システム要件	コントローラ とオンライン ・モニタ	コンソールと オンライン・ モニタ	仮想ユーザ・ ジェネレータ	仮想ユーザ	アナリシス・ モジュール
ハード・ディ スク領域	インストー ル：300 MB	インストー ル：350 MB	インストー ル：300 MB	インストー ル：130 MB	インストー ル：100 MB
	空き領域：200 MB	空き領域： 200 MB	空き領域：200 MB	空き領域：500 MB 以上	空き領域： 500 MB 以上
ブラウザ	<ul style="list-style-type: none"> • IE 5.1 SP1 以上 • Netscape Navigator 4.x, 6.x 	<ul style="list-style-type: none"> • IE 5.1 SP1 以上 • Netscape Navigator 4.x, 6.x 	<ul style="list-style-type: none"> • IE 5.1 SP1 以上 • Netscape Navigator 4.x, 6.x 	なし	<ul style="list-style-type: none"> • IE 5.1 SP1 以上 • Netscape Navigator 4.x, 6.x

注：最新のインストール要件の詳細については、
<http://www.mercury.com/jp/products/performance-center/loadrunner/requirements.html> を参照してください。

診断ハードウェアの要件

同じマシン上に診断メディアータと LoadRunner コントローラをインストールするには、750 MB のハードディスク領域が必要です。Diagnostics for J2EE および .NET のインストール要件の詳細については、『**Mercury Diagnostics for J2EE & .NET for LoadRunner 8.1 Installation and User's Guide**』（英語版）を参照してください。

第 2 章

お使いのコンピュータへの LoadRunner のインストール

LoadRunner パッケージには、Windows CD-ROM が 2 枚含まれています。Mercury LoadRunner 8.1 CD には、LoadRunner の完全インストールおよび仮想ユーザ・コンポーネントが含まれています。Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features CD には、LoadRunner 追加コンポーネントが含まれています。

本章では、次の項目について説明します。

- ▶ LoadRunner のインストールの種類
- ▶ インストール方法
- ▶ LoadRunner のインストールの完了
- ▶ カスタム・インストールのオプション
- ▶ アンインストール・プログラムの実行

LoadRunner のインストールの種類

次の表に、使用可能なインストールの種類を示します。

CD	インストールの種類
Mercury LoadRunner 8.1	<ul style="list-style-type: none">● LoadRunner 完全インストール● ロード・ジェネレータのみ● ファイアウォール越しの監視のみ● MI リスナーのみ● ERP および CRM メディエータ

CD	インストールの種類
Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features	<ul style="list-style-type: none">• WAN エミュレーション・ドライバ• SiteScope• チューニング・エージェント• 追加コンポーネント (Citrix Replay Agent, .NET Monitor Probe, COM+ Monitor Probe, IDE アドイン, MSDE, SAP Tools)

LoadRunner の完全設定を選択した場合は、標準構成またはカスタム構成を選択できます。カスタム構成を選択すれば、インストールする LoadRunner のコンポーネントを指定できます。

セットアップ・プログラムを実行すると、LoadRunner がシングルユーザ・コンピュータのハードディスクにインストールされます。

インストール方法

注：

- ▶ Windows NT 4.0 にインストールする場合は、NT 管理者としてログオンする必要があります。
- ▶ LoadRunner は、端末サービスを介してのインストールはサポートしません。

LoadRunner 8.1 をインストールする前に、以前のバージョンの LoadRunner を必ずアンインストールしてください。

LoadRunner または追加コンポーネントをお使いのコンピュータにインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 インストールするコンポーネントが含まれる LoadRunner CD を選択し、CD ドライブに挿入します。

- Windows の [スタート] メニューから [ファイル名を指定して実行] を選択して、インストール元を入力し、続けて「**setup.exe**」と入力します。例えば、CD-ROM ドライブのドライブ名が M の場合は、次のように入力します。

```
m:¥win32¥setup.exe
```

- Mercury LoadRunner 8.1 CD を実行している場合は、LoadRunner のセットアップ・プログラムが開始し、インストールのメイン画面が表示されます。



[LoadRunner の完全セットアップ], [ロード ジェネレータ], [ファイアウォール越しの監視], [MI リスナー], [ERP と CRM メディエータ] から、インストールの種類を選択します。

- ▶ **[LoadRunner の完全セットアップ]** を選択すると、LoadRunner コントローラ、Mercury Tuning Console、仮想ユーザ (GUI を含む)・コンポーネント、オンライン・マニュアル、サンプル・スクリプト、ロード・ジェネレータ、MI リス

ナー、およびERP/CRM メディエータがインストールされます。仮想ユーザを制御するコンピュータにインストールする場合は、このオプションを選択します。

注：VuGen のスタンドアロン・バージョンをインストールするには、**[LoadRunner の完全セットアップ]** インストールを選択し、**[カスタム インストール]** オプションを使用して VuGen を選択します。

- ▶ **[ロード ジェネレータ]** を選択すると、仮想ユーザを実行して負荷を生成するのに必要なコンポーネントと MI リスナーがインストールされます。負荷を生成するだけで仮想ユーザの制御は行わないコンピュータにインストールする場合は、このオプションを選択します。
- ▶ **[ファイアウォール越しの監視]** を選択すると、ファイアウォール越しに監視するためのコンポーネントがエージェント・マシンにインストールされます。詳細については、『**Mercury LoadRunner コントローラ・ユーザーズ・ガイド**』または『**Mercury Tuning Module Console User's Guide**』（英語版）の「Using Firewalls」の章を参照してください。
- ▶ **[MI リスナー]** を選択すると、ファイアウォール越しに仮想ユーザを実行し、監視するのに使用する MI リスナー・マシンに必要なコンポーネントがインストールされます。詳細については、『**Mercury LoadRunner コントローラ・ユーザーズ・ガイド**』または『**Mercury Tuning Module Console User's Guide**』（英語版）の「Using Firewalls」の章を参照してください。
- ▶ **[ERP と CRM メディエータ]** は、ERP/CRM 診断モジュールのオフライン・トランザクション・データを収集し、関連させるのに必要なコンポーネントをインストールします。詳細については、『**Mercury LoadRunner コントローラ・ユーザーズ・ガイド**』の「ERP/CRM 診断」の項を参照してください。

注：メディアータは、監視対象の ERP/CRM サーバーと同じ LAN 上にあるマシン（できれば専用のマシン）にインストールする必要があります。負荷テストに関する Siebel サーバまたは Oracle サーバにはメディアータをインストールしないことをお勧めします。

標準設定では、メディアータ・エージェントは、プロセスとして実行されるようにインストールされます。サービスとして実行されるようにメディアータ・エージェントを設定することをお勧めします。サービスとして実行されるようにエージェントを設定するには、[ユーザ ログインの設定] ウィンドウの [ユーザのログインなしで仮想ユーザを実行可能にする] を選択します。

- 4 Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features CD を実行している場合は、LoadRunner のセットアップ・プログラムが開始し、Additional Features のインストール画面が表示されます。



[WAN エミュレーション ドライバ], [SiteScope], [チューニング エージェント], [追加コンポーネント] から、インストール・タイプを選択します。

- ▶ [WAN エミュレーション ドライバ] を選択すると、負荷テスト・シナリオの実行中にさまざまなネットワーク・インフラストラクチャの振る舞いをエミュレートできます。このドライバは、ロード・ジェネレータ・マシンにインストールします。このドライバは、ロード・ジェネレータ・マシンにインストールします。
- ▶ [SiteScope] は、Siebel Web Server, SAP CCMS, SAP ポータル, サーバ・リソース・モニタに使用される SiteScope サーバをインストールします。

注：SiteScope は、パスにスペースを含むディレクトリにはインストールしないでください。また、インストール・パスは SiteScope と呼ばれるディレクトリで終る必要があります。

- ▶ [チューニング エージェント] は、コンピュータにチューニング・エージェントのみインストールします。チューニング・エージェントとは、コンソール・マシンでコンピュータをリモートで調整することを可能にするアプリケーションです。チューニング・エージェントおよびリモート・チューニングの詳細については、第10章「チューニング・エージェント」を参照してください。

注：チューニング・エージェントをインストールするには、ホスト・マシンに JRE バージョン 1.3 以降がインストールされている必要があります。

- ▶ [追加コンポーネント] では、次のコンポーネントをインストールできます。
 - ▶ [Citrix Replay Agent] は、Citrix クライアント・オブジェクトを特定する VuGen の機能を向上させるオプションのコンポーネントをサーバ・マシンにインストールします。Citrix エージェント・コンポーネントをインストールするには、**CitrixAgent.exe** ファイルを実行します。
 - ▶ [Microsoft COM+ Server Monitor Probe] は、COM+ 監視用のサーバ・マシンを設定します。COM+ プロブ・コンポーネントをインストールするには、**Com_Plus_Probe.exe** ファイルを実行します。サーバの設定の詳細

については、『Mercury LoadRunner モニタ・リファレンス』の「アプリケーション・コンポーネント」の項を参照してください。

- ▶ **[IDE Add-ins]** は、標準の開発環境においてアプリケーションのネイティブ言語で書かれるスクリプトの作成および実行を可能にするコンポーネントをインストールします。IDE Add-ins ディレクトリからアドインを選択し、アドインの実行可能ファイルを実行します。
- ▶ **[MSDE]** は、アナリシスの結果データの格納に使用する MSDE データベースをインストールします。MSDE をインストールするには、**Setup.exe** ファイルを実行します。
- ▶ **[SAPGUI Spy]** は、**[SAPGUI Client for Windows]** の開いているウィンドウにおける GUI スクリプト・オブジェクトの階層を調べるのに役立ちます。**[SAPGUI Spy]** コンポーネントをインストールするには、**mscomctl.ocx**, **Msflxgrd.ocx**, **msvbvm60.dll** の3つのファイルを、**SAP_Tools\SapGuiSpy\System32VBdlls** ディレクトリから **C:\WINNT\system32** ディレクトリにコピーして登録します。各ファイルを登録するには、Windows の [スタート] メニューから **[ファイル名を指定して実行]** を選択して、「regsvr32 <ファイル名>」と入力します。**SAP_Tools** ディレクトリから **SapSpy.exe** ファイルを実行します。
- ▶ **[SAPGUI Verify Scripting]** は、SAPGUI Scripting API が有効であることを検証するのに役立ちます。**[Verify Scripting]** コンポーネントをインストールするには、**SAP_Tools** ディレクトリから **VerifyScripting.exe** ファイルを実行します。
- ▶ **[Verify RFC User]** は、SAP システムに接続するために指定した SAP ユーザーが、SAP 診断モジュールで作業するのに必要な RFC 関数を呼び出す権限を持っているかどうかを確認します。**[Verify RFCUser]** コンポーネントをインストールするには、**RFCTFunctionsCollection.dll** ファイルを **Verify RFC User** ディレクトリからお使いのハード・ドライブにコピーして、Windows の [スタート] メニューから **[ファイル名を指定して実行]** を選択し「regsvr32 RFCTFunctionsCollection.dll」と入力してファイルを登録します。**Verify RFC User** ディレクトリで、ファイルをダブルクリックして **AddMTSDestinationsFolder.reg** をロードし、次に **VerifyRFCUser.exe** ファイルを実行します。

注：トランザクション・ブレイクダウン診断モニタのインストールと作業の詳細については、『Mercury Diagnostics for J2EE & .NET for LoadRunner 8.1 Installation and User's Guide』（英語版）を参照してください。

[WAN エミュレーション ドライバ] を選択してインストールすると、ロード・ジェネレータ・マシンに新しいプログラム・フォルダが作成され、ファイルのコピーが始まります。WAN エミュレーション・ドライバのインストール時に、開いているネットワーク接続が切断される場合があります。

- 5 インストールの種類を選択したら、InstallShield Wizard が開始され、ソフトウェア使用許諾契約が表示されます。使用許諾契約をお読みになり、**[はい]** をクリックして受け入れます。

Mercury LoadRunner 8.1 のインストール

登録情報 MERCURY™

名前、会社名、メンテナンス番号を入力してください。メンテナンス番号は Mercury LoadRunner 8.1 ライセンス証書に明記されているシリアル番号を入力してください。

名前 (N):

会社名 (C):

メンテナンス番号 (M):

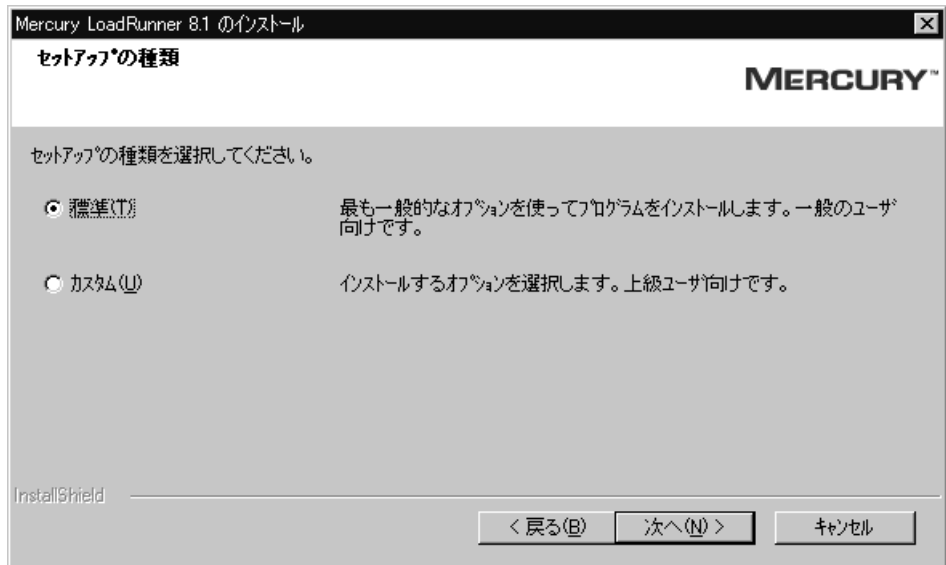
InstallShield

<戻る (B) 次へ (N)> キャンセル

- 6 [登録情報] ダイアログ・ボックスが表示されます。[登録情報] ダイアログ・ボックスで、名前、会社名、LoadRunner のシリアル番号を入力します。メンテナンス番号には、「ライセンス証書」に記載されているシリアル番号を入力してください。

[次へ] をクリックします。

- 7 完全インストールを行っている場合は、[セットアップの種類] ダイアログ・ボックスが表示されます。



インストール・タイプを次から選択します。[標準] か [カスタム] のどちらかを選択します。

[標準] では、LoadRunner コントローラ、Mercury Tuning Console、仮想ユーザ (GUI を含む) コンポーネント、オンライン・マニュアル、サンプル・スクリプトなど、一般的に使用されるすべての LoadRunner コンポーネントがインストールされます。仮想ユーザを制御するコンピュータにインストールする場合は、このオプションを選択します。

[カスタム] では、LoadRunner コンポーネントのすべてをインストールすることも、インストールするコンポーネントを選択することもできます。詳細については、22 ページ「カスタム・インストールのオプション」を参照してください。

[次へ] をクリックします。

- 8 完全インストールを行っている場合は、[ライセンス情報] ダイアログにお使いのコンピュータでの現在の LoadRunner のライセンス・キーが表示されます。



使用許諾契約の LoadRunner ライセンス・キーを入力します。LoadRunner を評価している場合や、永久ライセンス・キーを待っている場合は、「TEMPORARY」というライセンス・キーを入力します。「TEMPORARY」ライセンスでは 10 日間、25 仮想ユーザを動かすことができます。Mercury LoadRunner ライセンスの詳細については、第 4 章「ライセンスの表示と変更」を参照してください。

[次へ] をクリックします。

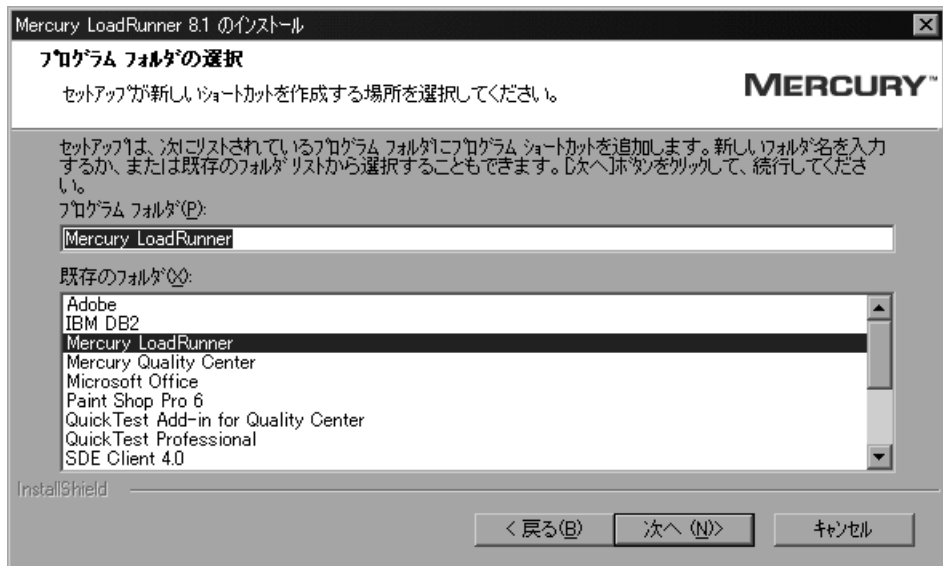
[次へ] をクリックします。「TEMPORARY」ライセンスを使用している場合は、LoadRunner から 10 日間 25 ユーザ限定の評価版であることを告げるメッセージが表示されます。[OK] をクリックします。インストール・プログラムによってライセンス情報が更新されます。

- 9 [インストール先の選択] ダイアログ・ボックスで、LoadRunner のインストール先フォルダを指定します。標準のインストール先を変更するには**参照ボタン**をクリックして、フォルダを選択し、**[OK]** をクリックします。



[次へ] をクリックします。

- 10 [プログラム フォルダの選択] ダイアログ・ボックスで、プログラム・フォルダを指定するか、標準のフォルダ「**Mercury LoadRunner**」をそのまま使用します。

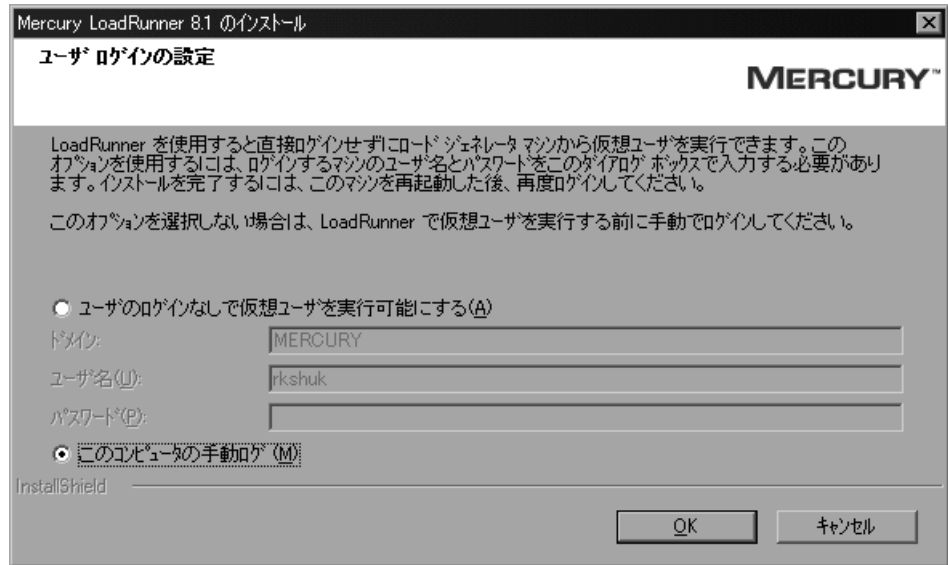


[次へ] をクリックします。

- 11 選択したインストールの設定内容が、読み取り専用のウィンドウに表示されず、設定内容を変更する場合は、[戻る] をクリックします。インストールを

開始するには、[次へ] をクリックします。インストールが始まります。進行状況バーが表示され、インストールの進行状況を知らせます。

- 12 [ユーザ ログインの設定] ダイアログ・ボックスで、ユーザのログイン設定を選択します。



次のユーザ・ログインの設定から1つ選択します。

[ユーザのログインなしで仮想ユーザを実行可能にする] : LoadRunner は自動的にロード・ジェネレータ・マシンからネットワークにログインします。仮想ユーザを手作業の必要なしで実行することが可能です。ユーザのコンピュータが所属するネットワーク・ドメイン、ユーザ名、パスワードを入力します。

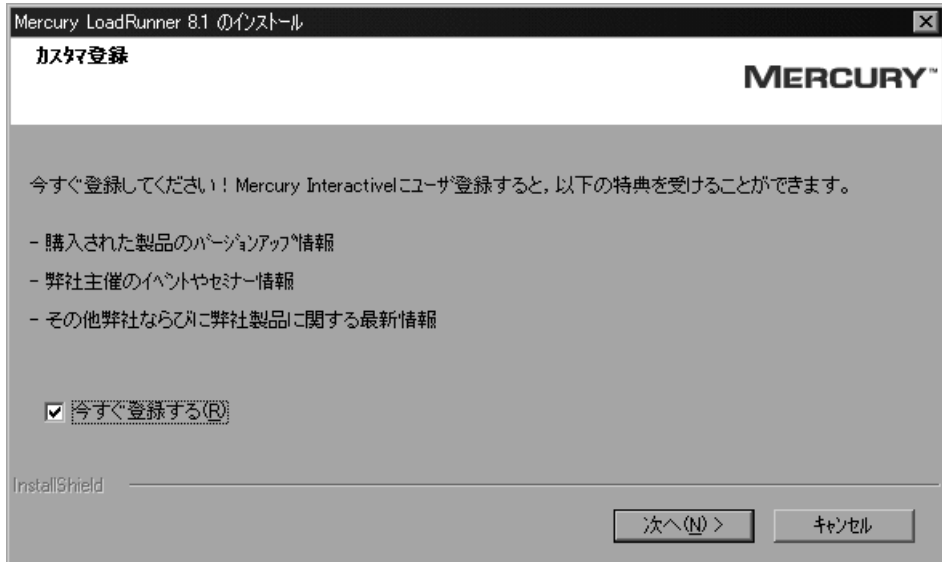
注 : 自動ログインを有効にするには、LoadRunner をインストールした後最低1回はシステムを手動で起動してログインする必要があります。

自動ログインで指定されるユーザには、ロード・ジェネレータ・マシンの管理者権限がなくてはなりません。

[このコンピュータの手動ログ] : ユーザは、仮想ユーザを実行するセッションごとに、ロード・ジェネレータ・マシンからネットワークに手動でログインする必要があります。

[OK] をクリックします。

- 13 標準設定では、[カスタマ登録] ダイアログ・ボックスで、[今すぐ登録する] ボックスがチェックされています。[次へ] をクリックして登録し、インストールを完了します。



4つの手順の登録プロセスを完了するために、Mercury カスタマー・サポート・サイトに接続されます。

- 14 セットアップ・プログラムからコンピュータを再起動するよう促すメッセージが表示されます。コンピュータは後で再起動することもできます。

注 : LoadRunner を完全インストールした場合、最初にログインしたときに「HCL Inetd CPLInquire cpl 8af40c」というメッセージが表示されます。このメッセージは、Windows NT のサービスとして Inetd がインストールされている場合の HCL (Hummingbird Communications Ltd.) Inetd サービスに関連するものです。メッセージ・ボックスを閉じて、作業を続けます。

LoadRunner のインストールはこれで完了です。

LoadRunner のインストールの完了

- ▶ お使いのコンピュータを再起動した後、Readme 文書が自動的に開かれます。文書により、LoadRunner の新機能や、制限事項の最新情報について確認できます。Readme を手動で開くには、[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [Readme] を選択します。
- ▶ Acrobat Reader を使って、LoadRunner のオンライン・ドキュメントを見ることができます。

最新の Adobe Acrobat Reader をインストールするには、[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [Documentation] > [Download Adobe Acrobat Reader] を選択します。

注：コンピュータに古いバージョンの Acrobat Reader がインストールされている場合は、[Acrobat Reader] をダウンロードする前に、アンインストールしてください。すでにバージョン 5.05 がインストールされている場合は、[Acrobat Reader Setup] を実行する必要はありません。

- ▶ 標準設定では、完全セットアップの一部として、LoadRunner によりサンプル web アプリケーションと web サーバ (Xitami) がインストールされます。サンプルの仮想ユーザ・スクリプト、様々なプロトコルに対するサンプル・アプリケーション、およびサンプル・データベース・サーバおよびテーブルを含む LoadRunner のサンプルのインストールを完了するには、LoadRunner のセットアップが終了した後で**サンプルのセットアップ**を実行します。サンプル・テストとセットアップの詳細については、第5章「LoadRunner のサンプルのインストール」を参照してください。
- ▶ お使いの LoadRunner にプラグが付属しており、まだプラグ (ドングル) をインストールしていない場合は、パラレル・ポートにプラグを挿入してインストールしてください。
- ▶ **Baan** 仮想ユーザ・スクリプトを作成するには、**Baan** のユーザ・ファイルで正しいアプリケーション・サーバを指定する必要があります。

bse/lib/userにある Baan フォルダの下に、u[username] というユーザ・ファイルが作成されます。次の行をユーザ・ファイルの先頭に追加します。

std_program:ottstpteststand

これにより、仮想ユーザを記録したり実行したりする際に、Test Standard Program を使用できます。

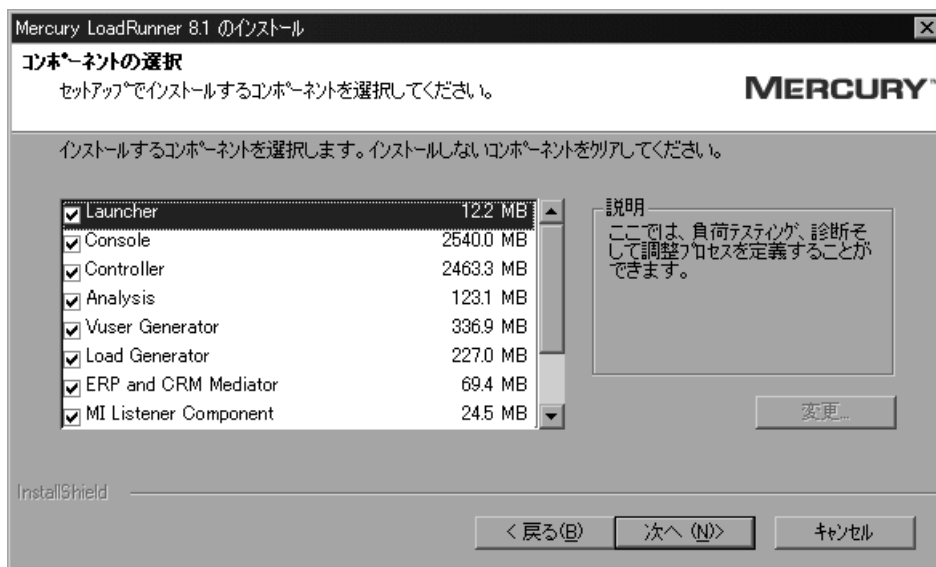
- ▶ LoadRunner を起動するには、[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [LoadRunner] を選択します。Mercury LoadRunner のランチャ・ウィンドウで、実行するアプリケーションを選択します。

カスタム・インストールのオプション

LoadRunner の [カスタム インストール] を選択すると、セットアップ・プログラムからインストールする LoadRunner のコンポーネントを選ぶことができます。次の LoadRunner コンポーネントをインストールできます。

- ▶ **Launcher** : インストールされたコンポーネントを開くのに使用する LoadRunner ランチャ・ウィンドウ。
- ▶ **Console** : チューニング・セッションを制御します。監視してセッション実行に関する情報を表示する、オンライン・モニタが含まれます。仮想ユーザを制御するマシンに、コンソールのみインストールします。
- ▶ **Controller** : シナリオと仮想ユーザの実行を制御します。監視してテスト実行に関する情報を表示する、オンライン・モニタが含まれます。仮想ユーザを制御するマシンに、コントローラのみインストールします。
- ▶ **Analysis** : 負荷テストの分析用のグラフとレポートです。
- ▶ **Vuser Generator** : 記録することで仮想ユーザ・スクリプトを作成する LoadRunner のツール。仮想ユーザ・スクリプトは、直接関数呼び出しを使用して、グラフィカルなユーザ・インタフェースなしでユーザをエミュレートします。サポートされているプロトコルについては、Readme をお読みください。
- ▶ **Load Generator** : 仮想ユーザ (Windows ベースの GUI 仮想ユーザを含む) を実行して負荷を生成するためのコンポーネント。GUI 仮想ユーザを実行するには、Mercury の機能テスト製品である QuickTest Professional または WinRunner がインストールされている必要があります。
- ▶ **ERP and CRM Mediator** : ERP/CRM 診断モジュール用のオフラインのトランザクション・データを収集および関連させる必要のあるコンポーネント。

- ▶ **MI Listener Component** : ファイアウォール越しに仮想ユーザを実行して監視するのに使用する MI リスナー用のコンポーネント。詳細については、『**Mercury LoadRunner コントローラ・ユーザズ・ガイド**』または『**Mercury Tuning Module Console User's Guide**』（英語版）の「ファイアウォールの使用」の章を参照してください。
- ▶ **Monitors over FireWall** : ファイアウォール越しに監視を行うエージェント・マシンのコンポーネント。詳細については、『**Mercury LoadRunner コントローラ・ユーザズ・ガイド**』または『**Mercury Tuning Module Console User's Guide**』（英語版）の「ファイアウォールの使用」の章を参照してください。
- ▶ **Online Documentation** : Acrobat 形式の全ユーザズ・ガイドです。
- ▶ **Samples** : LoadRunner のサンプルの航空券予約アプリケーションです。



インストールしないコンポーネントの横のチェック・ボックスをクリアして、インストールするコンポーネントの横のチェック・ボックスを選択します。

コントローラ、コンソール、またはロード・ジェネレータ・コンポーネントにインストールするサブコンポーネントを選択する場合は、[**変更**] ボタンをクリックし、インストールするサブコンポーネントの横のチェック・ボックスを選択して、[**次へ**] をクリックします。

[次へ] をクリックして、インストールを続けます。インストールを完了するには、16 ページの手順8に進みます。

アンインストール・プログラムの実行

LoadRunner のインストール・プログラムには、LoadRunner ソフトウェアとファイルをコンピュータからアンインストールし、LoadRunner ショートカットを [スタート] メニューから削除する、アンインストール・プログラムが含まれています。

LoadRunner のアンインストール・プログラムの実行は、次の手順で行います。

- 1 [スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [Uninstall Mercury LoadRunner] を選択します。
- 2 LoadRunner をアンインストールするかどうかを確認するメッセージが表示されます。

LoadRunner をアンインストールするには [はい] をクリックします。アンインストールせずに LoadRunner をコンピュータにインストールしたままにしておく場合は、[いいえ] をクリックします。

[はい] をクリックすると、[Uninstall Shield] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 3 アクティブな magentproc.exe のプロセスを終了するように促されることがあります。
[はい] をクリックし、プロセスを終了します。プロセスを終了せずにアンインストール・プログラムを終了し、LoadRunner をコンピュータにインストールしたままにしておく場合は、[いいえ] をクリックします。
- 4 どのプログラムにも使用されていない共有ファイルを削除するよう求められることがあります。わからない場合は、[すべていいえ] をクリックします。

アンインストール・プログラムによって、LoadRunner がコンピュータから削除されます。

- 5 アンインストール・プログラムが完了すると、コンピュータを再起動するように求められます。[はい] をクリックし、直ちに再起動します。後で再起動する場合は、[いいえ] をクリックします。[いいえ] をクリックした場合は、できるだけ早くアプリケーションをすべて終了してコンピュータを再起動します。

注： LoadRunner をインストールした直後にアンインストールする場合は、コンピュータを再起動してからアンインストールを実行してください。

第 3 章

LoadRunner コンポーネントの追加

LoadRunner のインストールが終了した後、LoadRunner コンポーネント（サンプル、仮想ユーザ・ジェネレータ、オンライン・マニュアルなど）をいつでも追加することができます。LoadRunner コンポーネントのセットアップ・プログラムを実行してインストールします。日本語のユーザ・インタフェースを使用するには、コンポーネントを追加するたびに Japanese User Interface Pack をインストールしてください。

コンポーネントを追加するには、次の手順を実行します。

- 1 インストールするコンポーネントを含む LoadRunner CD-ROM を選択して、CD-ROM ドライブに挿入します。
- 2 Windows の [スタート] メニューから [**ファイル名を指定して実行**] を選択します。
- 3 インストール・ドライブに続けて `setup.exe` と入力します。例えば、CD-ROM ドライブが **M** に指定されている場合は、次のように入力します。

```
m:¥win32¥setup.exe
```

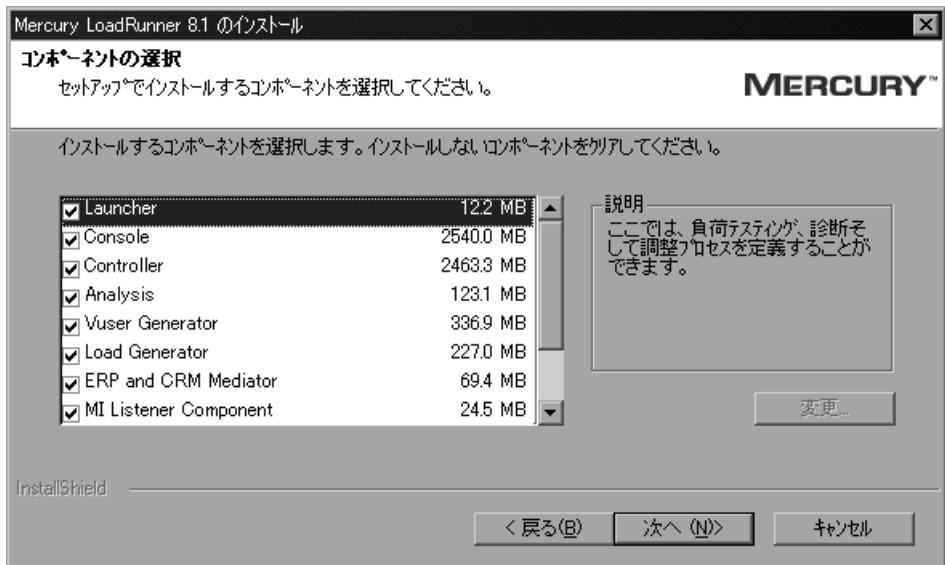
[**OK**] をクリックします。

- 4 Install Wizard が開始され、[言語の選択] ウィンドウが表示されます。インストール時に使用する言語を選択し、[次へ] をクリックします。使用許諾契約書が表示されます。[はい] をクリックして受け入れます。LoadRunner セットアップ・プログラムが起動します。
- 5 [登録情報] ダイアログ・ボックスで、名前、会社名、LoadRunner のシリアル番号を入力します。メンテナンス番号には、「ライセンス証書」に記載されているシリアル番号を入力してください。[次へ] をクリックします。

6 [カスタム] を選択し、[次へ] をクリックします。

追加する LoadRunner コンポーネントを選択します。追加しないコンポーネントについては、横にあるチェックボックスのチェックを外します。

注：すでにインストールされているコンポーネントのチェックを外しても、コンポーネントは削除されません。



[次へ] をクリックします。

7 選択したインストールの設定内容が、読み取り専用のウィンドウに表示されます。設定内容を確認します。設定内容を変更する場合は、[戻る] をクリックします。インストールを開始するには、[次へ] をクリックします。インストールが始まります。

8 LoadRunner のサンプルをインストールした場合は、サンプルのインストールを完了するためには [LoadRunner Samples] プログラム・グループからサンプル・セットアップを実行するようメッセージが表示されます。サンプル・テストとセットアップの詳細については、第5章「LoadRunner のサンプルのインストール」を参照してください。

[OK] をクリックして、セットアップを続行します。

- 9 標準では、セットアップ・プログラムにより **[Mercury LoadRunner]** プログラム・グループが作成され、LoadRunner のアイコンが **[プログラム]** グループに作成されます。

LoadRunner のアイコンを既存のプログラム・グループに追加するには、登録されているグループの中から該当するグループを選択します。**[次へ]** をクリックします。

- 10 追加するコンポーネントにより、セットアップ・プログラムからコンピュータを再起動するよう促すメッセージが表示される場合と、セットアップ完了を伝えるメッセージが表示される場合とがあります。コンピュータは後で再起動することもできます。
- 11 LoadRunner のオンライン文書をインストールした場合は、ドキュメント・ファイルを表示するのに Acrobat Reader を使用します。

Acrobat Reader をインストールするには、**[スタート]** > **[プログラム]** > **[Mercury LoadRunner]** > **[Documentation]** > **[Download Adobe Acrobat Reader]** を選択します。

注： コンピュータに古いバージョンの Acrobat Reader がインストールされている場合は、Acrobat Reader をダウンロードする前に、アンインストールしてください。すでにバージョン 5.05 がインストールされている場合は、**[Acrobat Reader Setup]** を実行する必要はありません。

第4章

ライセンスの表示と変更

ライセンスは、Mercury LoadRunner のランチャ・ウィンドウからいつでも直接変更できます。本章では、次の項目について説明します。

- ▶ ライセンス情報の表示
- ▶ ライセンスの変更
- ▶ トラブルシューティング

通常、セットアップ・プログラムの手順に従って、インストール中にライセンス・キーを入力します。しかし、インストール時にライセンス・キーを取得していない場合は、新規に LoadRunner をインストールする場合は、[ライセンスキー] ボックスに「**TEMPORARY**」と入力して、「TEMPORARY」ライセンス・キーを使用できます。「TEMPORARY」ライセンスでは 10 日間 25 仮想ユーザを動かすことができます。インストール後、MIJ ライセンス・センターに依頼し、購入したライセンス・キーを取得してください。

本章では、インストール中ではなく、インストール後にライセンス・キーを入力する方法と、既存のライセンスをアップグレードする方法について説明します。

ライセンス情報の表示

ライセンス情報は、Mercury LoadRunner コントローラのランチャ・ウィンドウで表示できます。

ライセンス・キー情報を表示するには、[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [LoadRunner] をクリックします。Mercury LoadRunner のランチャ・ウィンドウが開きます。[設定] メニューで、

[LoadRunner ライセンス] を選択して、[LoadRunner ライセンス情報] ダイアログ・ボックスを開きます。



[LoadRunner ライセンス情報] ダイアログ・ボックスには次の情報が表示されます。

[**ライセンス キー**] : 使用可能なライセンス・キーと、すべてのライセンス・キーのサマリを見ることもできます。

サマリ情報

[**タイプ**] : 選択したライセンス・キーで使用可能なライセンスのタイプを表示します。使用可能なライセンスのタイプは次のとおりです。

- ▶ **Permanent** : このタイプのライセンスに有効期限はありません。
- ▶ **Time Limited** : このタイプのライセンスは期限が限定されます。
- ▶ **Temporary** : このタイプのライセンスは、製品をインストールしてから、10 日間しか保証されません。
- ▶ **VUD-based** : VUD（仮想ユーザ日）に基づくライセンスでは、特定の数の VUD 仮想ユーザを購入することができます。24 時間の範囲内で、このライセンスで購入した仮想ユーザの一部を使用して、任意の数のテストを繰り返し実行できます。24 時間が経過すると、使用した分の仮想ユーザが、利用可能な仮想ユーザの総数から差し引かれます。

例えば、100 個の VUD 仮想ユーザを購入し、24 時間の範囲で 3 つの異なるシナリオで仮想ユーザを 20 個ずつ実行したとします。24 時間が経過すると、20

個（60個ではない）の仮想ユーザだけが利用可能な仮想ユーザの数から差し引かれます。残りの80個はその後いつでも使用できます。

注：標準設定では、深夜0時より24時間ですが、テストのスケジュールに合わせて開始時間の変更が可能です。

▶ **Plugged**：このタイプのライセンスにはドングルが必要です。

[**ライセンスの有効性**]：選択したライセンス・キーの時間制限を表示します。

[**仮想ユーザのタイプ**]：選択したライセンス・キーで使用可能な仮想プロトコルを表示します。

▶ **Global**：Global ライセンスは、仮想ユーザの総数内であれば、どのタイプの仮想ユーザでも動かすことができます。Global の後の数字は、仮想ユーザの総数です。

[**モニタ**]：選択したライセンス・キーで使用可能なサーバ・モニタを表示します。

[**ホスト ID**]：マシン固有の ID を表示します。マシン固有のライセンス・キーを入手するには、MIJ ライセンス・センターに連絡してください。

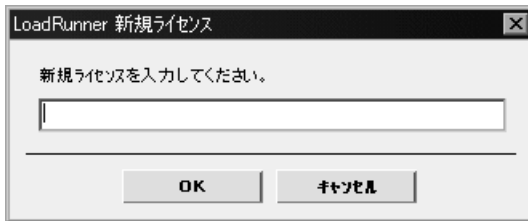
[**新規ライセンス**]：新規ライセンス番号を入力できる [LoadRunner 新規ライセンス] ダイアログ・ボックスが開きます。与えられた通りの正確なライセンス番号を入力し、[OK] をクリックします。

ライセンスの変更

ライセンス情報の変更は、Mercury LoadRunner コントローラのランチャ・ウィンドウから行えます。

現在のライセンス情報を変更するには、次の手順を実行します。

- 1 で [] > [] を選択して、[] ダイアログ・ボックスを開きます。
- 2 [新規ライセンス] をクリックします。[LoadRunner 新規ライセンス] ダイアログ・ボックスが開きます。



- 3 新しいライセンス番号を正しく入力します。[OK] をクリックします。ライセンスの有効期間が限定されている場合は、それを通知するメッセージが表示されます。
- 4 [OK] をクリックして、[LoadRunner 新規ライセンス] ダイアログ・ボックスを閉じます。

トラブルシューティング

TEMPORARY ライセンスを使用して LoadRunner, および Japanese User Interface Pack のインストールを行った場合は、ライセンスの申請を行い、MIJ ライセンス・センターからライセンス・キーの発行を受けてください。

LoadRunner および Japanese User Interface Pack でライセンス・キーが受け入れられない場合は、次の点を確認してください。

- ▶ ライセンス・キーを正しく入力しているかどうかを確認します。ライセンス・コードは大文字と小文字を区別します。
- ▶ LoadRunner のライセンスで LoadRunner を実行するときはプラグ（ dongle ）が必要と定められている場合は、プラグがインストールされていないことを示すメッセージが表示されます。この場合は、次のようにしてください。

管理者としてログインします。

< LoadRunner のインストール先フォルダ > %bin%install.exe を実行します。

コンピュータを再起動します。

- ▶ コントローラ起動中に「拒否されました」というエラー・メッセージが表示されたら、レジストリの HKEY_LOCAL_MACHINE キーと WINNT ディレクトリ（Windows がインストールされているディレクトリ）に対して、「**フルコントロール**」権限を許可しなくてはなりません。

レジストリ権限を追加するには、次の手順を実行します。

- 1 regedt32 を実行してレジストリを変更します。
- 2 HKEY_LOCAL_MACHINE キーを選択します。
- 3 [セキュリティ] > [アクセス許可] を選択します。
- 4 コントローラを実行するユーザに「フルコントロール」権限を追加します。
- 5 Windows NT 4.0 の場合は、「既存のサブキーのアクセス権を置き換える」フラグを有効にします。
- 6 [OK] をクリックします。

NTFS ファイル・システムで権限を追加するには、次の手順を実行します。

- 1 < System Drive > %WinNT フォルダを選択します。
- 2 プロパティを呼び出します。

- 3 [セキュリティ] タブを選択します。
- 4 [アクセス権] をクリックします。
- 5 ユーザに対し「フルコントロール」権限を追加します。
- 6 Windows NT 4.0 の場合は、「サブディレクトリのアクセス権を置き換える」フラグを有効にします。
- 7 [OK] をクリックします。

第 5 章

LoadRunner のサンプルのインストール

LoadRunner のインストール・プログラムには、仮想ユーザ・スクリプトのサンプル、サンプル・アプリケーション、サンプル・データベース・サーバとテーブルが含まれています。LoadRunner のサンプルを使用するためには、LoadRunner サンプルのインストールを実行しなくてはなりません。

本章では、次の項目について説明します。

- ▶ セットアップ・プログラム
- ▶ サンプルのセットアップの手順
- ▶ Corba および RMI 用の Readme ファイルへのアクセス

LoadRunner サンプルについて

LoadRunner サンプルには、次のものが含まれます。

- ▶ 仮想ユーザ・スクリプトのサンプル
このスクリプトは LoadRunner の機能を紹介し、すぐに実際のテストを実行できるようにします。
- ▶ サンプルのフライト予約アプリケーション
サンプルのフライト予約アプリケーションは航空券予約システムで、旅行代理店が航空券を注文できるシステムです。旅行代理店は、中央のデータベース・サーバに接続されているクライアント・アプリケーションで作業します。このアプリケーションは、Web, Com, Corba, RMI, ODBC, MS ACCESS, Oracle, Sybase, WinSocket などのプロトコルに利用できます。

▶ サンプル・データベース・サーバとテーブル

Quadbase サーバをインストールできます。これは ODBC データベース・サーバで、デモンストレーション用に LoadRunner に付属しています。あるいは、航空券予約システムを、すでにご使用になっているデータベース・サーバに接続することもできます。インストール・プログラムは、選択されたどちらかのサーバでサンプルのアプリケーションを使用するのに必要なテーブルをすべてインストールします。

セットアップ・プログラム

LoadRunner サンプル・セットアップ・プログラムは、以下のことを行います。

- ▶ サンプルの Quadbase ODBC サーバとクライアントをインストールします (任意)。
- ▶ サンプルのフライト・アプリケーションに使用するデータ・テーブルを、Quadbase サーバあるいは他に指定したサーバに作成し、値を代入します。
- ▶ サンプルの仮想ユーザ・スクリプトをインストールし、サンプルの仮想ユーザ・スクリプトに対するデータベース接続文字列を更新します。
- ▶ **flights.ini** ファイルを管理し、フライト・アプリケーションで使用できるようにします。
- ▶ Flights-ODBC_Access と、Flights-Winsock のデータソースを ODBC Administrator で登録します。
- ▶ LoadRunner の Samples のプログラム・グループ用のアイコンを追加します。

注：標準設定では、LoadRunner の完全セットアップの一部として、サンプル Web アプリケーションおよび Web サーバ (Xitami) がインストールされます。

サンプルのセットアップの手順

LoadRunner サンプルを使用中のコンピュータにインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 サンプルの Quadbase ODBC サーバのインストールを行わず、既存のデータベースまたは WinSock アプリケーション・サーバを使用する場合は、そのサーバが動作中であることと、接続パラメータについての知識があることを確かめます。
- 2 **[スタート]** > **[プログラム]** > **[Mercury LoadRunner]** > **[Samples Setup]** を選択します。[ようこそ] ダイアログ・ボックスが表示されます。

[次へ] をクリックして、コンポーネントとサブ・コンポーネントのリストの画面に進みます。コンポーネントを選択します。標準 ODBC の場合は、「**Quadbase**」も選択してください。



[次へ] をクリックします。

- 3 [インストール先の選択] ダイアログ・ボックスで、LoadRunner のインストール先フォルダを指定します。別の場所を選択するには、**[参照]** をクリックし

てフォルダを選択し、[OK] をクリックします。[次へ] をクリックして次に進みます。

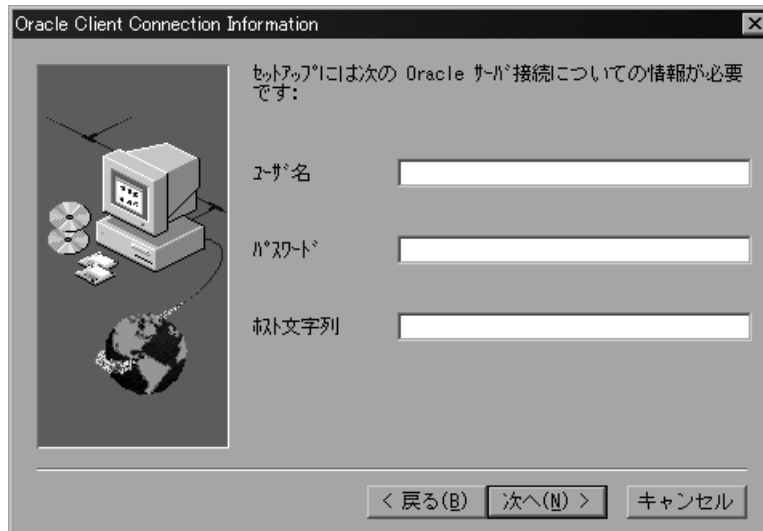


- 4 [プログラム フォルダの選択] ダイアログ・ボックスで、プログラム・フォルダを指定するか、標準のフォルダ「**Mercury LoadRunner**」をそのまま使用して [次へ] をクリックします。



Quadbase サーバが実行を開始します。

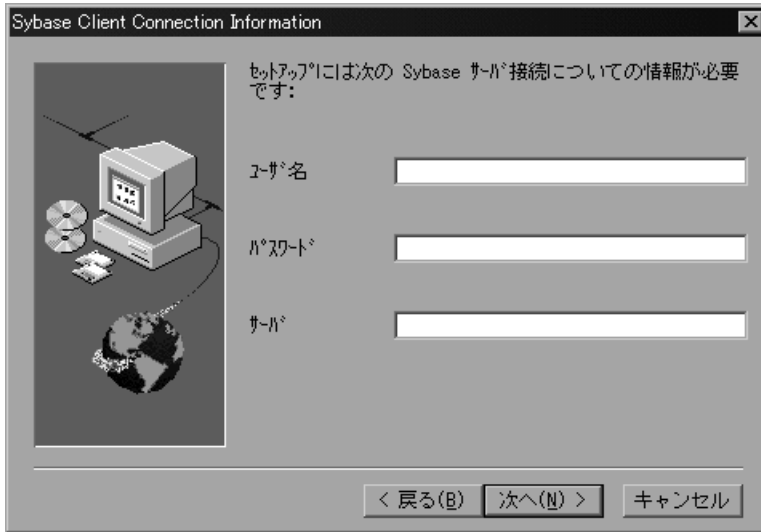
- 5 Oracle コンポーネントをインストールしている場合は、Oracle Client 接続情報を入力するようメッセージが表示されます。[**ユーザ名**]、[**パスワード**]、[**ホスト文字列**] の各フィールドに最新情報を入力します（お使いのシステムで入手できる場合）。接続情報を入力し、[**次へ**] をクリックします。



Oracle サーバの場合は、インストールした Oracle Client のバージョンを選択するようメッセージが表示されます。バージョンを選択して、[**次へ**] クリックをクリックします。

サンプルの Flights データベースをお使いのサーバにインストールまたは更新するかどうか尋ねる確認メッセージが表示されます。[**はい**] をクリックします。

- 6 Sybase コンポーネントをインストールしている場合は、Sybase Client 接続情報を入力するようメッセージが表示されます。[**ユーザ名**]、[**パスワード**]、[**Server**] の各フィールドに最新情報を入力します（お使いのシステムで入手できる場合）。接続情報を入力し、[**次へ**] をクリックします。



サンプルの **Flights** データベースを Sybase サーバにインストールまたは更新するかどうか尋ねる確認メッセージが表示されます。[**はい**] をクリックします。

- 7 セットアップが完了すると、メッセージが表示されます。[**完了**] をクリックして、セットアップ・プログラムを閉じます。新しいプログラム・アイコンが表示されます。

注 : **dat/flight32.mdb** をローカル・ドライブにコピーし、手作業で登録しておくことをお勧めします。このファイルをネットワーク上に残したままにしておくと、他のユーザが誤ってアクセスする可能性があります。

Corba および RMI 用の Readme ファイルへのアクセス

サンプルの Readme ファイルには、CORBA および RMI サンプル・アプリケーションの詳しい使用方法が説明されています。

- ▶ RMI 用のサンプルの場合は、下記をご覧ください。

[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [Samples] > [RMI] > [RMI フライト ヘルプ]

- ▶ Corba 用のサンプルの場合は、下記をご覧ください。

[スタート] > [プログラム] > [Mercury LoadRunner] > [Samples] > [Corba] > [Corba フライト ヘルプ]

第 2 部

UNIX へのインストール

第 6 章

UNIX へのインストールについて

LoadRunner を UNIX プラットフォームにインストールして仮想ユーザを実行することができます。UNIX 仮想ユーザは、Windows コンピュータにインストールされている LoadRunner コントローラと対話します。LoadRunner コントローラのインストールについては、本書の第 1 部を参照してください。

本章では、インストールの手順と LoadRunner の UNIX 仮想ユーザ・コンポーネントに必要なシステムについて説明します。

UNIX へのインストール

本書では、サポートされるすべての UNIX プラットフォームの LoadRunner 仮想ユーザのインストール内容について説明します。特定のプラットフォームにだけ適用される節があれば、その旨を明記します。

インストール作業の主な手順は次のとおりです。

- ▶ プログラム・ファイルのインストール
- ▶ 環境の設定

インストールが完了したら、LoadRunner を使った作業の詳細について、別のマニュアルを参照してください。

環境の設定

LoadRunner 仮想ユーザはシステムの実際のユーザをエミュレートするので、ユーザが正しく実行できるよう仮想ユーザ・マシンの環境を設定しておく必要があります。環境変数は、C シェル・ユーザ用には **.cshrc** ファイルで、Bourne シェルおよび K シェル・ユーザ用には **.profile** ファイルで定義されています。

- ▶ インストール作業により、仮想ユーザが実行中のプラットフォームを決定し、C シェル・ユーザの場合は **.cshrc** ファイルを変更するスクリプトが用意されます。Bourne シェルおよび K シェル・ユーザは、**.profile** ファイルを手作業で変更する必要があります。サンプルの **.cshrc** および **.profile** ファイルについては、第9章「インストールの検証」を参照してください。
- ▶ LoadRunner のインストール中に、LoadRunner の bin ディレクトリと、基盤となるプロトコルが使用する任意の DLL の場所を指定する環境変数の設定が簡単に行えます。環境変数の名前は AIX では LIBPATH が、HP/UX では SHLIB_PATH が、Solaris と Linux では LD_LIBRARY_PATH です。

動作環境

実際に必要な記憶容量は、マシンの構成によって異なります。インストール時には、別途インストール用の記憶容量が必要です。LoadRunner をインストールするディスク・パーティションに、十分なディスク領域、プロセス・エントリ、スワップ領域があることを確認します。

次の表に、LoadRunner の UNIX 仮想ユーザに対して、Mercury がサポートしている各プラットフォームのシステム要件を示します。

プラットフォーム	ハードウェア	バージョン
Solaris	Ultra Sparc	Solaris 2.8 以上
HP	HP 9000 シリーズ, 700 および 800 シリーズ	HP-UX 11 以上
IBM	IBM RS/6000	AIX 4.3 以上
Linux	PC i486	Red Hat 9.0 以上

LoadRunner は、すべての X Server をサポートします。

注：Linux プラットフォームでは、セキュリティと不具合の修正を提供する更新された glibc パッケージをインストールする必要があります。詳細については、<https://rhn.redhat.com/errata/RHSA-2003-325.html#Red%20Hat%20Linux%208.0> を参照してください。

LoadRunner のインストール要件の最新情報については、<http://www.mercury.com/jp/products/performance-center/loadrunner/requirements.html> を参照してください。

システム・リソース

以下に、各プラットフォームとオペレーティング・システムに必要なシステム・リソースを示します。実際に必要なリソースは、購入された仮想ユーザのライセンス数により異なります。

以下に各仮想ユーザに適したリソースを示します。複数の仮想ユーザをインストールする場合は、仮想ユーザの数に合わせて拡張しなくてはなりません。

ディスク領域 —プログラムをインストールするのに必要な容量	22 MB (Linux の場合は 34 MB)
メモリ領域 —各仮想ユーザをスレッドとして実行する場合に必要な容量	300 KB (最小) この容量は、オペレーティング・システムやプラットフォームによって異なります。またこれには、プロセスで使用するメモリは含まれません。
メモリ領域 —各仮想ユーザをプロセスとして実行する場合に必要な容量	1.5 MB (Solaris の場合は 2.5 MB)
スワップ領域	約 1 : 7 メモリ / スワップ

空きプロセス・エントリー各仮想
ユーザをプロセスとして実行する
場合に1仮想ユーザにつき必要な
エントリ数 1

ファイル記述子ー各仮想ユーザを
スレッドとして実行する場合に1
仮想ユーザにつき必要な数 2 (次のページを参照)

前のページに記載されているメモリ領域は、一般的なC仮想ユーザを対象として
います。その他の種類の仮想ユーザの場合は、より多くのメモリ領域が必要
になります。例えば、各Web仮想ユーザは、最低500KBで動作します。

ロード・ジェネレータは、以下のファイル記述子リソースを使用します。

- ▶ LoadRunner 起動サービス用に14ファイル記述子
- ▶ LoadRunner エージェント用に20ファイル記述子
- ▶ 各仮想ユーザ・ドライバ用に30ファイル記述子。標準設定では、50仮想ユーザごとに1ドライバがあります。

例えば、100個のスレッドである仮想ユーザを実行するのに使用するファイル
記述子の数を計算するには、ロード・ジェネレータは次を必要とします。

- 14 LoadRunner ランチャ用
- 20 LoadRunner エージェント用
- 60 2ドライバ用 (30 x 2, それぞれが50仮想ユーザを駆
動する)
- 200 100仮想ユーザごとに (各仮想ユーザに2つ)

合計 : 294 ファイル記述子

仮想ユーザがスレッドとしてではなくプロセスとして実行されている場合は、
仮想ユーザごとに1つのドライバが実行されます。したがって、各仮想ユー
ザ・ドライバ用に30ファイル記述子が必要です。

カーネルを再構築することで、ファイル記述子、プロセス・エントリ、スワッ
プ領域の容量を増やせます。

注：LoadRunner 7.0 以上を使用するほとんどのオペレーティング・システムには、十分なファイル記述子、プロセス・エントリ、スワップ領域が標準で用意されています。

プロセス・エントリを増やす

各仮想ユーザには空いているプロセス・エントリがいくつか必要です。システムでプロセス・エントリ数を増やすには、カーネルを再構築しなければなりません。

Solaris 2.6

次の節では、Solaris のオペレーティング・システムでのカーネルの再構築の方法を説明します。

- 1 `/etc/system` ファイルを開きます。
- 2 システム・ファイルにプロセスの最大数を設定します。次のように入力します。

```
set max_nprocs=number (例えば 712)
```

- 3 `touch/reconfigure` コマンドを実行します。次のように入力します。

```
touch /reconfigure
```

- 4 コンピュータを再起動します。

HP-UX

次の節では、HP プラットフォームでのカーネルの再構築の方法を説明します。

- 1 `root` としてログインします。
- 2 `sam` ツールを起動し、カーネルを再構築します。次のように入力します。

```
sam &
```

- 3 [Kernel Configuration] > [Configurable Parameters] を選択します。
- 4 次のパラメータの値を設定します。
nproc : 同時プロセス数 - (仮想ユーザ数 × 2) + 200
maxuser : ユーザの最大数 - DB 仮想ユーザ + RTE 仮想ユーザ + 20
maxuprc : 各仮想ユーザのプロセス数 - 仮想ユーザ数 × 2
- 5 コンピュータを再起動します。

IBM

次の節では、AIX オペレーティング・システムを使って、IBM プラットフォームでカーネルを再構築する方法を説明します。

- 1 現在の設定を表示します。次のように入力します。

```
lsattr -EHL sys0
```

- 2 各ユーザのプロセス・エントリの最大数を増やします。次のように入力します。

```
chdev -l sys0 -a maxuprcs = number (例えば, 500)
```

- 3 **nproc** パラメータと **maxusers** パラメータに値を設定します。

Linux

次の節では、Linux プラットフォームでのカーネルの再構築の方法を説明します。

- 1 `/etc/security/limits.conf` ファイルを開きます。
- 2 `limits` ファイルにプロセスの最大数を設定します。次のように入力します。

```
hard nproc 8192
```

- 3 コンピュータを再起動します。

ファイル記述子を増やす

仮想ユーザには6 (DB 仮想ユーザ) ~ 27 (GUI 仮想ユーザ) のファイル記述子のエントリが必要です。プラットフォームとシェルでは、ファイル記述子の増やし方の手順が異なります。

すべてのプラットフォーム

この例では、記述子の数を最大 1024 まで増やします。

- 1 sh ユーザと ksh ユーザは、次のように入力します。

```
ulimit -n 1024
```

- 2 csh ユーザは、次のように入力します。

```
limit descriptors 1024
```

Solaris

次の節では、Solaris オペレーション・システムでのファイル記述子の増やし方を説明します。この例では、記述子の数を最大 1024 まで増やします。

- 1 **adb** コマンドを使ってファイル記述子を増やします (方法はすべてのシェルで共通)。16 進数の 400 は 10 進法で 1024 に相当します。次の例では、**kernel** はカーネル・ファイル (kernel/unix) の名前です。

```
adb -w -k /kernel/dev/mem
rlimits+28?W 400
rlimits+28/W 400
```

- 2 カーネルを再構築することで、ファイル・プロセスの最大数を増やすこともできます。

root としてログインして、**/etc/system** ファイルの **rlim_fd_max** パラメータを設定します。

```
set rlim_fd_max=1024
```

- 3 ファイルを保存し、次のように入力してシステムを再構築します。

```
touch /reconfigure
```

- 4 システムを再構築したら、コンピュータを再起動します。

HP-UX

次の節では、HP プラットフォームでのファイル記述子の増やし方を説明します。

- 1 root としてログインします。
- 2 **sam** ツールを起動し、カーネルを再構築します。次のように入力します。

```
sam &
```

- 3 [Kernel Configuration] > [Configurable Parameters] を選択します。
- 4 **maxfiles** パラメータに値を設定します。これは Sun のプラットフォームのファイル記述子に相当します。

maxfiles : 指定した時間で開くファイル数。通常は 60 に設定されています。設定を 500 ~ 1024 の間の数に変更します。

- 5 コンピュータを再起動します。

Linux

次の節では、Linux のオペレーション・システムでのファイル記述子の増やし方を説明します。この例では、記述子の数を最大 8192 まで増やします。

- 1 **/etc/security/limits.conf** ファイルに次の行を追加します。

```
hard nfile 8192
```

- 2 **/etc/sysctl.conf** ファイルに次の行を追加します。

```
fs.file-max = 8192
```

- 3 コンピュータを再起動します。

スワップ領域を増やす

各仮想ユーザには、200 KB ~ 4 MB の範囲のスワップ領域が必要です。システム構成に領域を追加する前に、ページング要件を決定することをお勧めします。多くのメモリを必要とするプログラムを実行する環境の場合は、物理メモリの4倍のページング領域を確保することをお勧めします。ページング領域を十分に確保しないと、プロセスが強制終了され、他のプロセスも起動できなくなることがあります。

Solaris

次の節では、Solaris を実行するコンピュータでのスワップ領域の増やし方を説明します。

- 1 使用可能なページング領域を表示します。次のように入力します。

```
swap -l
```

- 2 使用可能なスワップ領域を表示します。次のように入力します。

```
swap -s
```

- 3 新規のページング・ファイルを作成します。次のように入力します。

```
mkfile size path (例えば, mkfile 50m /extra/page_1)
```

- 4 既存の構成設定にページ・ファイルを追加します。次のように入力します。

```
/usr/etc/swapon -a /extra/page_1 0 102400
```

- 5 ファイル・システムの構成設定にリストされているスワップ領域をすべて使用可能にします。次のように入力します。

```
/usr/etc/swapon -a
```


IBM

次の節では、AIX オペレーティング・システムを実行するコンピュータでスワップ領域を増やす方法を説明します。

- 1 使用可能なページング領域を表示します。次のように入力します。

```
lsps -a
```

- 2 使用可能なスワップ領域を表示します。次のように入力します。

```
swap -s
```

- 3 実際のファイル・サイズの4分の1の値を使って、新規のページング・ファイルを作成します。例えば、**chemvg** ボリューム・グループに **200 MB** のページング領域を作成するには、次のように入力します。

```
mkps -a -n -s 50 chemvg
```

- 4 既存のページング・ファイルのサイズを増やすには、次のように入力します。

```
chps -s number paging_file
```

(例えば、`chps -s 10 page_01` は `page_01` に 40 MB 追加します。)

- 5 既存の構成設定にページ・ファイルを追加します。次のように入力します。

```
swapon paging_area (例えば、 swapon /dev/paging_01)
```

- 6 **/etc/swspaces** ファイル・システムの構成ファイルにリストされているすべてのスワップ領域を使用可能にします。次のように入力します。

```
swapon -a
```

診断用のハードウェア要件

Diagnostics for J2EE および .NET のインストール要件の詳細については、
『**Mercury Diagnostics for J2EE & .NET for LoadRunner 8.1 Installation and User's Guide**』（英語版）を参照してください。

第 7 章

UNIX への LoadRunner のインストール

LoadRunner は、配付パッケージに入っているインストール・メディアを使ってインストールします。このインストールでは、Java Runtime Environment (JRE) を使用します。

次の節では、UNIX の CD-ROM デバイスから LoadRunner の UNIX コンポーネントをインストールする方法を説明します。CD-ROM デバイス搭載の UNIX マシンを使用していない場合、CD から直接お使いのコンピュータに UNIX コンポーネントをコピーして、FTP を使うかディレクトリを NFS マウントして直接 UNIX ディレクトリに転送できます。

環境の確認

- ▶ CD-ROM デバイスがローカル・マシンまたはリモート・マシンに取り付けられていることを確かめます。
- ▶ そのドライブで使用できるデバイス・ドライバを見つけます。デバイス・ドライバは通常、ドライブが取り付けられているコンピュータの **/dev** ディレクトリにあります。デバイス名はシステム管理者に問い合わせてください。

複数のプラットフォームでの LoadRunner のインストール

複数の UNIX プラットフォームで LoadRunner を実行するには、各プラットフォームで個々のディレクトリ LoadRunner をそれぞれインストールしなくてはなりません。インストール・ディレクトリは、すべてのプラットフォームに

アクセスできなければなりません。インストールの最後に、この章の最後の手順に従って、LoadRunner インストール・ディレクトリを示す環境変数を変更します。

例えば、LoadRunner を Sun マシンと IBM マシンの両方にインストールする場合、次のディレクトリを使用します。

- ▶ LoadRunner Solaris の場合：`/tools/mercury/sol/lrunner`
- ▶ LoadRunner IBM の場合：`/tools/mercury/ibm/lrunner`

複数のプラットフォームのシナリオを実行する場合は、いずれのディレクトリも NFS マウントされていないなければなりません。Solaris マシンと IBM マシンは、互いのインストール・ディレクトリにアクセスします。

インストール・プログラムの実行

インストール・プログラムを起動する前に、CD からインストール・スクリプト、`install.sh` にアクセスできることを確認してください。ほとんどのオペレーティング・システムでは、CD-ROM ドライブをローカル・ディレクトリにマウントしなくてはなりません。IBM での CD-ROM のマウントの詳細については、65 ページ「CD-ROM からのインストール準備 (IBM のみ)」を参照してください。

インストールには、UI (または AWT) モードとコンソール・モードの2つがあります。

- ▶ UI モードでインストールする場合は、`DISPLAY` 環境変数が正しく設定されていることを確認してください。
- ▶ コンソール・モードでインストールする場合は、コマンドラインに `-console` パラメータを追加します。例を次に示します。

```
install.sh -console
```

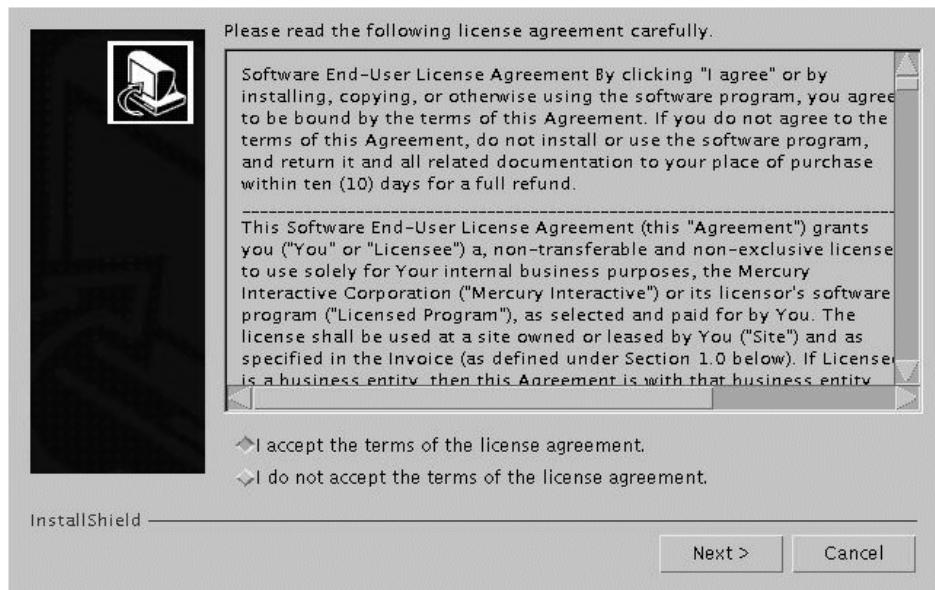
LoadRunner のインストール・プログラムを実行するには、次の手順を実行します。

注：以下に示す手順は、UI モードの場合です。

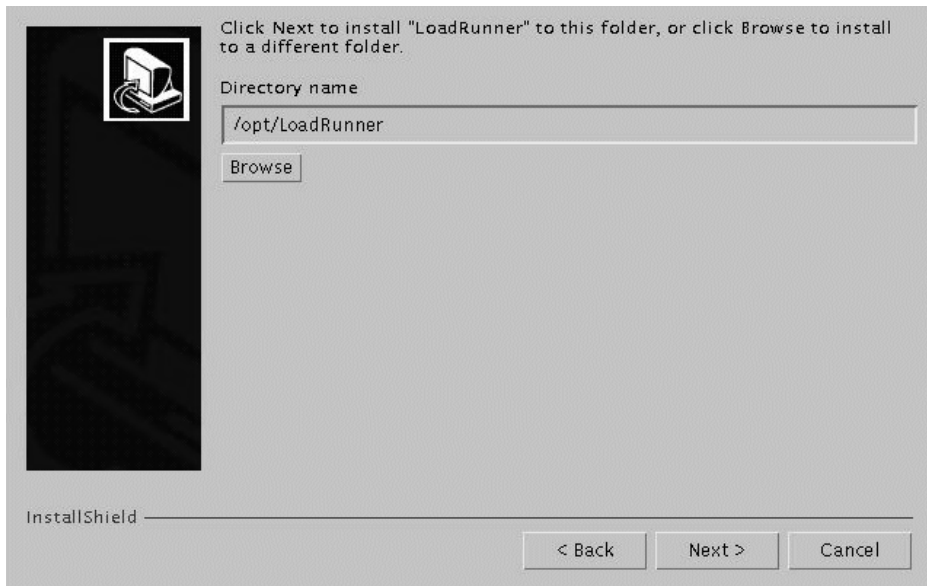
1 次のように入力します。

```
install.sh
```

InstallShield Wizard が開始され使用許諾契約が表示されます。



- 2 使用許諾契約を読み終え、同意する場合は「使用条件に同意します」を選択し、「次へ」をクリックします。LoadRunner Setup プログラムが開始されます。



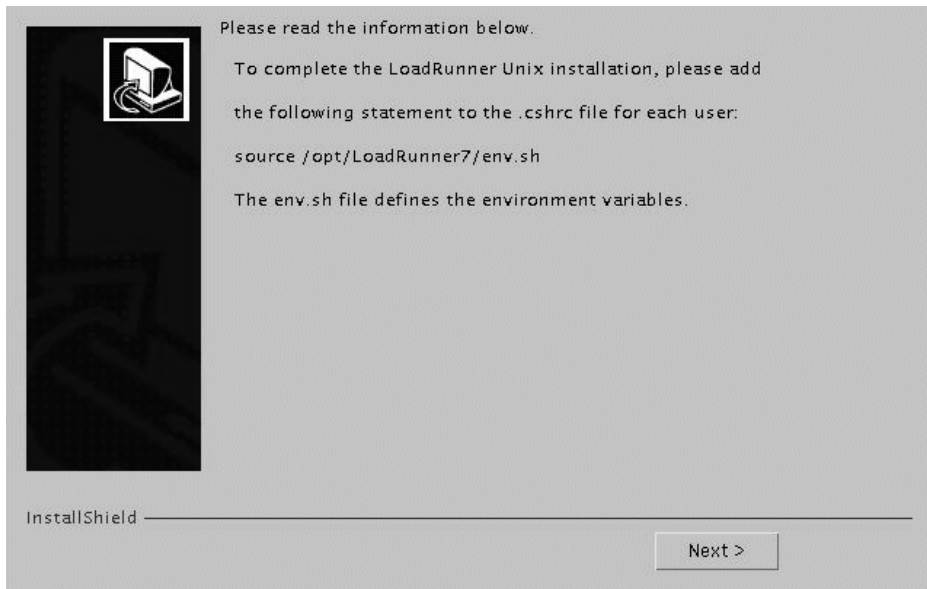
LoadRunner のインストール先を選択します。標準以外の場所を選ぶには、**[ブラウズ]** ボタンをクリックしてディレクトリを選択し、**[OK]** をクリックします。**[次へ]** をクリックします。

- 3 読み取り専用のダイアログ・ボックスにインストールの設定が表示されます。



設定内容を変更する場合は、**[戻る]** をクリックします。インストールを開始するには、**[次へ]** をクリックします。インストールが始まります。

- 4 インストールの最後に、LoadRunner 環境変数の設定についてメッセージが表示されます。次の手順5で、LoadRunner 環境変数の設定の概要を説明します。まず、[次へ] をクリックして、自動インストールを終了します。



- 5 このインストール作業で、**env.sh** というファイルが生成されます。このファイルには、C シェル環境用の環境変数定義が含まれます。各 LoadRunner ユーザ用の **.cshrc** ファイルを開き、下記のステートメントを追加します。

```
source /opt/LoadRunner7/env.sh
```

/opt/LoadRunner7 には、LoadRunner のインストール・ディレクトリを指定します。

Bourne シェルと K シェル・ユーザは、**.profile** ファイルの修正方法について第8章「インストール後の作業」を参照してください。

- 6 新たに端末を起動して、**.cshrc** ファイルを実行します。**cshrc** ファイルの詳細については、第8章「インストール後の作業」を参照してください。
- 7 **verify_generator** を必ず実行して、仮想ユーザのインストール内容を確認します。これは、指定したディレクトリやデバイス名が正しいかどうか、十分なディスク領域があるかどうか確認するための作業です。**verify_generator** で実行するテストの詳細については、第9章「インストールの検証」を参照してください。

CD-ROM からのインストール準備 (IBM のみ)

IBM プラットフォームで LoadRunner をインストールする場合、インストール・プログラムにアクセスする CD-ROM ドライブをマウントしなくてはなりません。

CD-ROM ドライブをマウントするには、次の手順を実行します。

- 1 CD-ROM を CD ドライブに入れ、ログインするか **su** を実行して **root** になります。
- 2 次のように入力して、LoadRunner のインストール・ディレクトリを作成します。

```
mkdir -p /usr/cdrom/lrun
```

- 3 CD-ROM ファイル・システムを追加するには、**SMIT** を使用する必要があります。プログラムを入力するには、次のように入力します。

```
smit storage
```

- 4 **SMIT** から [**File Systems**] を選択します。
- 5 [**Add/Change/Show/Delete File Systems**] を選択します。
- 6 [**CD ROM File Systems**] を選択します。
- 7 [**Add a CDROM File System**] を選択します。
- 8 デバイス名を選択します。CD-ROM のファイル・システムに付けるデバイス名は一意でなくてはなりません。
- 9 **MOUNT POINT** に次のように入力します。

```
/usr/cdrom/lrun
```

- 10 **ASCII** インタフェースを使用している場合は、**Do** コマンドを選択するか **Enter** キーを押します。
- 11 **SMIT** プログラムを終了します。
- 12 CD-ROM のファイル・システムをマウントするために、次のコマンドを入力します。

```
smit mountfs
```

- 13 [FILE SYSTEM Name] で、**/dev/cd0** または **/dev/cd1** を選択します。
- 14 マウント・ディレクトリを選択します。

```
/usr/cdrom/lrun
```

- 15 **cdarfs** を選択して、ファイル・システムの TYPE を設定します。
- 16 [**Yes**] を選択して、読み込み専用システムとしてマウントします。
- 17 ASCII インタフェースを使用している場合は、**Do** または **Enter** キーを選択します。
- 18 root ユーザとしての接続を閉じます。

アンインストール・プログラムの実行

このインストールでは、Java Runtime Environment (JRE) を使用します。プログラムのアンインストールは、UI モードでもコンソール・モードでも実行できます。コンソール・モードでアンインストールする場合は、コマンドラインの最後に **console** パラメータを追加します。

LoadRunner のアンインストール・プログラムを実行するには、次のようにします。

- 1 プログラムを入力するには、次のように入力します。

```
cd <installation directory>/_uninst
```

- 2 次のように入力します。

```
uninstall [-console]
```

第 8 章

インストール後の作業

LoadRunner のインストールが終了したら、作業を開始する前に環境が正しく設定されていることを確認します。

本章では、次の項目について説明します。

- ▶ 環境変数の設定
- ▶ 権限の確認
- ▶ サンプルの `.cshrc` ファイルと `.profile` ファイル

インストール後の環境設定が完了したら、LoadRunner の検証ユーティリティを実行して、インストール内容を検証します。詳細については、第 9 章「インストールの検証」を参照してください。

環境変数の設定

LoadRunner のインストール作業で、環境変数を設定する `env.sh` が生成されます。環境変数を定義して `cshrc` ファイルを手動で更新するのではなく、`env.sh` にアクセスするステートメントを `.cshrc` ファイルの最後にインクルードします。この節では、`env.sh` ファイル内の環境変数について説明します。K シェルまたは Bourne シェルで作業している場合、これらの変数は、`.cshrc` ファイルと `.profile` ファイルの両方に設定してください。次に C シェル・ユーザの構文を示します。K シェルおよび Bourne シェルをお使いの方は、70 ページ「`.profile` ファイルでの LoadRunner の設定」を参照してください。

- ▶ `M_ROOT`
- ▶ `PATH`
- ▶ `LD_LIBRARY_PATH` (Solaris, Linux), `LIBPATH` (AIX), `SHLIB_PATH` (HP-UX)

M_LROOT : M_LROOT に LoadRunner のインストール・ディレクトリを設定します。例を以下に示します。

```
setenv M_LROOT /tools/lrunner
```

PATH : PATH 変数に LoadRunner の実行可能なプログラムの場所である **bin** ディレクトリを追加しなくてはなりません。

```
set path = ($path $M_LROOT/bin)
```

LD_LIBRARY_PATH : LoadRunner のダイナミック・ライブラリの場所を含むパス (\$M_LROOT/bin)。パスを設定するには、次のように入力します。

```
setenv LD_LIBRARY_PATH ${LD_LIBRARY_PATH}.$M_LROOT/bin /*Solaris  
と Linux*/  
setenv SHLIB_PATH ${SHLIB_PATH}.$M_LROOT/bin/*HP プラットフォーム */  
setenv LIBPATH ${LIBPATH}.$M_LROOT/bin /*IBM プラットフォーム */
```

アプリケーションで使用するダイナミック・ライブラリを調べて、パスに適切なダイナミック・ライブラリのパス環境変数 (LD_LIBRARY_PATH, SHLIB_PATH または LIBPATH) が含まれていることを確認します。

アプリケーションで使用するダイナミック・ライブラリを調べるには、次のように入力します。

```
ldd my_application /* Sun と Linux プラットフォーム */chatr  
my_application /* HP プラットフォーム */  
dump -H my_application /* IBM プラットフォーム */
```

注 : Oracle73 を使用する場合は、Oracle73 のライブラリ・パスをダイナミック・ライブラリ・パスの環境変数に追加しなくてはなりません。

権限の確認

リモート・ホストで仮想ユーザを実行するには、**リモート・シェル**を実行する権限が必要です。ホストの権限を確認するには、次のように入力します。

- ▶ Solaris, Linux, IBM のプラットフォームの場合、次のように入力します。

```
rsh hostname ls
```

- ▶ HP のプラットフォームの場合は、次のように入力します。

```
remsh hostname ls
```

権限がない場合は、**.rhosts** ファイル (`man rsh` または `man remsh` で各コマンドの使用方法が表示され、**.rhosts** に関する記述もあります) を確認してください。

サンプルの .cshrc ファイルと .profile ファイル

.cshrc ファイルでの LoadRunner の設定

次に、.cshrc ファイル内での LoadRunner の設定例を示します。

```
# LoadRunner 設定 #
# マシンごとの LoadRunner のインストール先に基づいてパスを指定する

switch ("`uname`")
  case SunOS:
    setenv M_LROOT {LoadRunner Solaris のインストール・パス }
    setenv LD_LIBRARY_PATH ${LD_LIBRARY_PATH}:${M_LROOT}/bin
    breaksw

  case HP-UX:
    setenv M_LROOT {LoadRunner HP-UX のインストール・パス }
    setenv SHLIB_PATH ${M_LROOT}/bin ${SHLIB_PATH}
    breaksw

  case Linux:
    setenv M_LROOT { LoadRunner SunOs のインストール・パス }
```

```
setenv LD_LIBRARY_PATH ${LD_LIBRARY_PATH}:${M_LROOT}/bin
breaksw

case AIX:
setenv M_LROOT {LoadRunner AIX インストール・パス }
setenv LIBPATH ${M_LROOT}/bin:${LIBPATH}
breaksw
endsw

set path = ($M_LROOT/bin $path)

# LoadRunner 設定の終了 #
```

.profile ファイルでの LoadRunner の設定

次に、K シェル環境と Bourne シェル環境における .profile ファイルの LoadRunner の設定例を示します。

```
# LoadRunner 設定 #
# マシンごとの LoadRunner のインストール先に基づいてパスを指定する

case "`uname`" in
SunOS)
M_LROOT={LR Solaris インストール・パス }; export M_LROOT
LD_LIBRARY_PATH=${M_LROOT}/bin; export LD_LIBRARY_PATH
;;

HP-UX)
M_LROOT={LR HP-UX インストール・パス }; export M_LROOT
SHLIB_PATH=${M_LROOT}/bin ; export SHLIB_PATH
;;

AIX)
M_LROOT={ LR AIX インストール・パス }; export M_LROOT
LIBPATH=${M_LROOT}/bin ; export LIBPATH
;;

Linux)
```

```
M_LROOT={LR Linux インストール・パス }; export M_LROOT
LD_LIBRARY_PATH=${M_LROOT}/bin; export LD_LIBRARY_PATH
esac
```

```
PATH=${M_LROOT}/bin:${PATH}; export PATH
```

```
# LoadRunner 設定の終了 #
```


第 9 章

インストールの検証

LoadRunner には、**verify_generator** というセットアップの検証用ユーティリティがあり、LoadRunner のセットアップを検査できます。環境変数と **.cshrc** ファイルを検査して、正しく設定されていることを確認します。**verify_generator** ユーティリティは、リモートの仮想ユーザ・ホストを検査します。

仮想ユーザのインストールが終了したら、LoadRunner を起動する前に **verify_generator** を実行することをお勧めします。

verify_generator テスト

ユーティリティは、仮想ユーザ環境で次の項目を検査します。

- ▶ 最低 128 のファイル記述子を持っていること。
- ▶ **.rhost** ファイルの権限 (**-rw-r--r--**) が正しいこと。
- ▶ **rsh** を使ったホスト通信が可能なこと。通信が不可能な場合は、**.rhosts** 内のホスト名を検査します。
- ▶ **M_LROOT** が定義されていること。
- ▶ **.cshrc** が正しい **M_LROOT** を定義していること。
- ▶ ホーム・ディレクトリに **.cshrc** が存在すること。
- ▶ 現在のユーザが **.cshrc** のオーナーであること。
- ▶ LoadRunner のインストールが **\$M_LROOT** に存在すること。
- ▶ 実行可能ファイルが実行可能な権限を持っていること。
- ▶ **PATH** に **\$M_LROOT/bin** と **/usr/bin** が含まれていること。
- ▶ **rstatd** デーモンが存在し、起動していること。

verify_generator オプション

検証ユーティリティは、通信パラメータと、すべての種類の仮想ユーザの互換性について、ローカル・ホストを検査します。すべての仮想ユーザを1台のホストで実行する場合は、次のように入力します。

```
verify_generator
```

verify_generator は、設定が正しければ「OK」を返します。「Failed」が返された場合は、正しく設定し直す方法を示します。

verify_generator の構文は次のとおりです。

```
verify_generator [-v]
```

-v を指定することで、検査の詳細が表示されます。

第 3 部

チューニング・エージェントのインストールと
アンインストール

第 10 章

チューニング・エージェント

本章では、Mercury チューニング・コンソールを使用する場合に、ホスト・マシンへのチューニング・エージェントのインストール、およびホスト・マシンからのチューニング・エージェントのアンインストールを行う方法について説明します。チューニング・エージェントは、インストール手順を実行することによって、あるいは Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features CD からホスト・マシンにファイルをコピーすることによって、インストールできます。

本章は次の項で構成されています。

- ▶ インストール手順の実行によるチューニング・エージェントのインストール
- ▶ ファイルのコピーによるチューニング・エージェントのインストール
- ▶ チューニング・エージェントの特権の要件
- ▶ チューニング・エージェントのアンインストール

注：チューニング・エージェントをインストールするには、ホスト・マシンに JRE バージョン 1.3 以降がインストールされている必要があります。

インストール手順の実行によるチューニング・エージェントのインストール

- 1 ホスト・マシンのドライブに Mercury LoadRunner 8.1 Additional Features アドイン CD を挿入し、インストール手順を実行します。
- 2 インストール手順で [Tuning Agent] アクションを選択します。

ファイルのコピーによるチューニング・エージェントのインストール

コンソール・マシンからファイルをコピーすることによって Windows ホストにローカルにチューニング・エージェントをインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 perfagent.tar ファイル（コンソール・マシンの `¥Mercury LoadRunner¥console¥bin` ディレクトリに存在）をホスト・マシン上のディレクトリ（`C:¥Program Files¥Mercury Interactive¥Tuning Agent` など）に抽出します。
- 2 ホスト・マシンで、`PE_HOME` 環境変数を設定します（この例では、`PE_HOME = C:¥Program Files¥Mercury Interactive¥Tuning Agent`）。
- 3 ホスト・マシンで、チューニング・エージェント・アプリケーションを起動します。この例では、次のファイルを実行します。

```
C:¥Program Files¥Mercury Interactive¥Tuning Agent¥agent¥bin¥pe_agent.exe
```

UNIX ホストにローカルにチューニング・エージェントをインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 perfagent.tar ファイル（コンソールがインストールされている Windows マシンの `¥Mercury LoadRunner¥console¥bin` ディレクトリに存在）を UNIX マシン上のディレクトリ（`/usr/local/tuningagent` など）にコピーし、このディレクトリに抽出します。
- 2 ホスト・マシンで、`PE_HOME` 環境変数を設定します（`csh` の場合の例では、`setenv PE_HOME /usr/local/tuningagent`）。
- 3 ホスト・マシンで、チューニング・エージェントのバッチ・ファイルを起動します。この例では、次のファイルを実行します。

```
/usr/local/tuningagent/agent/bin/pe_agent
```

次の例のように、インストール先ディレクトリのパスをコマンド・ラインの `pe_agent` に渡せば、手順2は省くことができます。

```
% pe_agent 0 true /usr/local/tuningagent
```

チューニング・エージェントの特権の要件

設定およびサーバ・ログ情報をクライアントに提供するために、チューニング・エージェントには特定の特権が必要です。チューニング・エージェントをホストまたは実行するユーザは、正しく機能するように、必要なすべての特権を持っていなければなりません。チューニング・エージェントは必要なすべての環境にアクセスできますが、チューニング操作および環境のサブセットへのクライアント・ユーザのアクセスは **security.properties** ファイルで制御できます。

各オペレーティング・システムおよびサーバ環境の要件のリストについて、以下で操作ごとに概要を示します。環境での特定の操作に必要なすべての特権がチューニング・エージェントにない場合、操作は正しく実行されません。エラー・メッセージは表示される場合もされない場合もあります（操作の重要度によって変わります）。

オペレーティング・システム Windows NT/2000

操作	要件
OS 情報の取得	レジストリ・キーおよび Win32 API 呼び出し
設定の取得	レジストリ・キー (HKEY_LOCAL_MACHINE)
設定の更新	レジストリ・キー (HKEY_LOCAL_MACHINE)
オペレーティング・システムの開始 / 停止	Win32 API InitiateSystemShutdown (&133;)
Windows サービスの開始 / 停止	net start/stop
ログの取得	イベント・ビューアおよび netstat.exe
ログのクリア	イベント・ビューア

オペレーティング・システム HP-UX 9/10

操作	要件
OS 情報の取得	<code>uname</code> , <code>model</code> , <code>etc/dmesg</code> への実行アクセス権
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/usr/sbin/kmtune</code> への実行アクセス権 • <code>kmtune</code> がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権 • <code>ndd</code> への実行アクセス権 • <code>ndd</code> がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/usr/sbin/kmtune</code> への実行アクセス権 • <code>kmtune</code> がアクセスする全ディレクトリへの書き込みアクセス権 • <code>ndd</code> への実行アクセス権 • <code>ndd</code> がアクセスする全ディレクトリへの書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	<code>sync</code> および <code>reboot</code> への実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/var/log/syslog*</code> への読み取りアクセス権 • <code>/var/adm/messages*</code> • <code>netstat</code> への実行アクセス権 • <code>/tmp</code> への書き込みアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/var/log/syslog*</code> への削除アクセス権 • <code>/var/adm/messages*</code> • <code>netstat</code> への実行アクセス権

オペレーティング・システム IBM AIX 4.x/5.x

操作	要件
OS 情報の取得	<code>uname</code> , <code>prtconf</code> , <code>bootinfo</code> , <code>vmstat</code> への実行アクセス権
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> • <code>vmtune</code> への実行アクセス権 • <code>vmtune</code> がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権 • <code>no</code> への実行アクセス権 • 読み取り - <code>no</code> がアクセスする全ディレクトリへのアクセス
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> • <code>vmtune</code> への実行アクセス権 • <code>vmtune</code> がアクセスする全ディレクトリへの書き込みアクセス権 • <code>no</code> への実行アクセス権 • <code>no</code> がアクセスする全ディレクトリへの書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	<code>sync</code> および <code>reboot</code> への実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/var/log/syslog*</code> への読み取りアクセス権 • <code>/var/adm/messages*</code> • <code>netstat</code> への実行アクセス権 • <code>/tmp</code> への書き込みアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> • <code>/var/log/syslog*</code> への削除アクセス権 • <code>/var/adm/messages*</code> • <code>netstat</code> への実行アクセス権

オペレーティング・システム Linux

操作	要件
OS 情報の取得	uname Read-access /proc/cpuinfo への実行アクセス権
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> • sysctl への実行アクセス権 • sysctl がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> • sysctl への実行アクセス権 • sysctl がアクセスする全ディレクトリへの書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	sync および reboot への実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • /var/log/syslog* への読み取りアクセス権 • /var/adm/messages* • netstat への実行アクセス権 • /tmp への書き込みアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> • /var/log/syslog* への削除アクセス権 • /var/adm/messages* • netstat への実行アクセス権

オペレーティング・システム Solaris 2.x

操作	要件
OS 情報の取得	uname , prtconf , psrinfo , vmstat への実行アクセス権
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> • /etc/system への読み取りアクセス権 • ndd への実行アクセス権 • ndd がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> • /etc/system への書き込みアクセス権 • ndd への実行アクセス権 • ndd がアクセスする全ディレクトリへの読み取りアクセス権
サービスの開始 / 停止	sync および reboot への実行アクセス権

操作	要件
ログの取得	<ul style="list-style-type: none">• <code>/var/log/syslog*</code> への読み取りアクセス権• <code>/var/adm/messages*</code>• <code>netstat</code> への実行アクセス権• <code>/tmp</code> への書き込みアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none">• <code>/var/log/syslog*</code> への削除アクセス権• <code>/var/adm/messages*</code>• <code>netstat</code> への実行アクセス権

Web サーバ : Apache 1.x / 2.x

操作	要件
設定の取得	<Apache>/conf/*.conf への読み取りアクセス権
設定の更新	<Apache>/conf/*.conf への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプト, または Apache.exe (Windows の場合) あるいは apachectl (UNIX の場合) への実行アクセス権
ログの取得	*.conf ファイルに定義されている <ErrorLog> および <CustomLog> への読み取りアクセス権
ログのクリア	*.conf ファイルに定義されている <ErrorLog> および <CustomLog> への削除アクセス権

Web サーバ : IBM Httpd 1.x, 2.x

操作	要件
設定の取得	<IBMHttpd>/conf/*.conf への読み取りアクセス権
設定の更新	<IBMHttpd>/conf/*.conf への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトまたは net start/stop (Windows の場合)
ログの取得	*.conf ファイルに定義されている <ErrorLog> および <CustomLog> への読み取りアクセス権
ログのクリア	*.conf ファイルに定義されている <ErrorLog> および <CustomLog> への削除アクセス権

Web サーバ : iPlanet Enterprise Web Server 6.x

操作	要件
設定の取得	iPlanet ドメインごとに magnus.conf および jvm12.conf への読み取りアクセス権
設定の更新	iPlanet ドメインごとに magnus.conf および jvm12.conf への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	<ul style="list-style-type: none"> • Windows の場合は、iPlanet ドメイン・ディレクトリ内の startsvr.bat / stopsvr.bat • UNIX の場合は、iPlanet ドメイン・ディレクトリ内の startsvr / stopsvr
ログの取得	<iPlanet ドメイン・ホーム >/logs ディレクトリ内の access* ファイル, errors* ファイルへの読み取りアクセス権
ログのクリア	<iPlanet ドメイン・ホーム >/logs ディレクトリ内の access* ファイル, errors* ファイルへの削除アクセス権

Web サーバ : Microsoft IIS 4/5/6 および ASP 2/3

操作	要件
設定の取得	IIS://LocalHost/W3SVC メタベースへの読み取りアクセス権
設定の更新	IIS://LocalHost/W3SVC メタベースへの更新アクセス権
サービスの開始 / 停止	net start/stop 'World Wide Web Publishing Service'
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • IIS://LocalHost/W3SVC への読み取りアクセス権 (LogFileDirectory パラメータのため) • <LogFileDirectory>/W3SVC*/*.log への読み取りアクセス権
ログのクリア	< LogFileDirectory >/W3SVC*/*.log への削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : Microsoft ASP.NET 1.x

操作	要件
設定の取得	<p><ASP.NETCONFIGDir>/machine.config (web.config) への読み取りアクセス権 例： C:¥WINNT¥Microsoft.NET¥Framework¥v1.1.4322 (HKLM¥¥SOFTWARE¥¥Microsoft¥¥ASP.NET¥¥ の下のレジストリにあり)</p>
設定の更新	<p><ASP.NETCONFIGDir>/web.config (machine.config) への書き込みアクセス権 例： C:¥WINNT¥Microsoft.NET¥Framework¥v1.1.4322 (HKLM¥¥SOFTWARE¥¥Microsoft¥¥ASP.NET¥¥ の下のレジストリにあり)</p>
サービスの開始 / 停止	<p>net.exe start/stop 'World Wide Web Publishing Service'</p>
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> ● <ASP.NETCONFIGDir>/machine.config (web.config) への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 ● ユーザ定義トレース・ファイルへの読み取りアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> ● <ASP.NETCONFIGDir>/machine.config (web.config) への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● ユーザ定義トレース・ファイルへの削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : Tomcat 2.x, 3.x

操作	要件
設定の取得	<Tomcat>/conf/server.xml への読み取りアクセス権
設定の更新	<Tomcat>/conf/server.xml への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スタートアップ / シャットダウン・スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<Tomcat>/logs ディレクトリ内の Access* ファイル, *.log ファイル, *.txt ファイルへの読み取りアクセス
ログのクリア	<Tomcat>/logs ディレクトリ内の Access* ファイル, *.log ファイル, *.txt ファイルへの削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : WebLogic 6.x, 7.x, 8.x

操作	要件
設定の取得	<WebLogicConfigDir>/<domain>/config.xml への読み取りアクセス権
設定の更新	<WebLogicConfigDir>/<domain>/config.xml への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<WebLogicConfigDir>/<domain> ディレクトリ内の wl-domain.log ファイル, access.log ファイル, weblogic.log ファイルへの読み取りアクセス権
ログのクリア	<WebLogicConfigDir>/<domain> ディレクトリ内の wl-domain.log ファイル, access.log ファイル, weblogic.log ファイルへの削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : WebSphere Standalone (4.x)

操作	要件
設定の取得	<WebsphereConfigDir>/*.xml への読み取りアクセス権
設定の更新	<WebsphereConfigDir>/*.xml への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> ● <HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Application Server> の下の Windows レジストリにある plugin-cfg.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 <WebsphereConfigDir>/server-cfg.xml ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 <WebsphereHomeDir>/logs/activity.log ● <WebsphereHomeDir>/bin/showlog.bat (showlog.sh) への実行アクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> ● <HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Application Server> の下の Windows レジストリにある plugin-cfg.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereConfigDir>/server-cfg.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHomeDir>/logs/activity.log への削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : WebSphere Enterprise (4.x)

操作	要件
設定の取得	<p><WebsphereHome>/bin/XMLConfig.bat (XMLConfig.sh) への実行アクセス権</p> <p>/tmp ディレクトリへの読み取りおよび書き込みアクセス権</p>
設定の更新	<p><WebsphereHome>/bin/XMLConfig.bat (XMLConfig.sh) への実行アクセス権</p> <p>/tmp ディレクトリへの読み取りおよび書き込みアクセス権</p>
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • <WebsphereHome>/bin/admin.config への読み取りアクセス権 • 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 • <HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Application Server> の下の Windows レジストリにある plugin-cfg.xml • 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 • <WebsphereHome>/properties/*.wascl ファイル • 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 • <WebsphereHome>/logs/*FatalError.log • <WebsphereHome>/logs/wssetup.log • <WebsphereHome>/logs/activity.log> • <WebsphereHomeDir>/bin/showlog.bat (showlog.sh) への実行アクセス権

操作	要件
<p>ログのクリア</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● <WebsphereHome>/bin/admin.config への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Application Server> の下の Windows レジストリにある plugin-cfg.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHome>/properties/*.wascl ファイルへの読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHome>/logs/*FatalError.log <WebsphereHome>/logs/wssetup.log <WebsphereHome>/logs/activity.log への削除アクセス権

Web アプリケーション・サーバ : WebSphere (5.x)

操作	要件
設定の取得	<WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/server.xml への読み取りアクセス権
設定の更新	<WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/server.xml への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/variables.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/variables.xml ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/variables.xml ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/server.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権 ● <WebsphereHome>/bin への実行アクセス権

操作	要件
<p>ログのクリア</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/variables.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/variables.xml ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/variables.xml ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 ● <WebsphereHome>/config/cells/<cellName>/nodes/<nodeName>/servers/<serverName>/server.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権 <p><WebsphereHome>/bin への実行アクセス権</p>

データベース : Microsoft SQL 7.5, 2000

操作	要件
設定の取得	MSSQL sp_configure
設定の更新	MSSQL sp_configure
サービスの開始 / 停止	net start/stop
ログの取得	Error Log ディレクトリ (MSSQLServer¥Parameters "-e" 引数で定義) への読み取りアクセス権
ログのクリア	Error Log ディレクトリ (MSSQLServer¥Parameters "-e" 引数で定義) への削除アクセス権

データベース : Oracle 8.x / 9.x

操作	要件
設定の取得	読み取り - init.ora ファイルへのアクセス
設定の更新	読み取り - init.ora ファイルへのアクセス
サービスの開始 / 停止	Windows の場合は「net start/stop OracleService<SID>」、UNIX の場合はスタートアップ / シャットダウン即時コマンドとともに「sqlplus internal」
ログの取得	<SID> の bdump/ ディレクトリ, udump/ ディレクトリ, adump/ ディレクトリ, cdump/ ディレクトリ, および statspack 出力ファイルへの読み取りアクセス権
ログのクリア	<SID> の bdump/ ディレクトリ, udump/ ディレクトリ, adump/ ディレクトリ, cdump/ ディレクトリ, および statspack 出力ファイルへの削除アクセス権

データベース : IBM-DB2 7.x

操作	要件
設定の取得	db2cmd への実行アクセス権
設定の更新	db2cmd への実行アクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スタートアップ / シャットダウン・スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	DIAGPATH のための db2cmd への実行アクセス権 次への読み取りアクセス権 <DIAGPATH>/db2diag.log <DIAGPATH>/db2alert.log <DIAGPATH>/t*. * <DB2HOME>/db2dump/*. * および「ログ・ファイルへのパス」ディレクトリ内の DB2 インスタンスごとの *.log
ログのクリア	次への削除アクセス権 : <DIAGPATH>/db2diag.log <DIAGPATH>/db2alert.log <DIAGPATH>/t*. * <DB2HOME>/db2dump/*. * および「ログ・ファイルへのパス」ディレクトリ内の DB2 インスタンスごとの *.log

ERP/CRM:Oracle 9iAS

操作	要件
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> ● <OracleHome>/opmn/conf/opmn.xml への読み取りアクセス権 ● opmn.xml から取り込まれたパスの server.xml への読み取りアクセス権 ● 上記の設定ファイルに記載されている設定ファイルへの読み取りアクセス権 ● server.xml パスの data-sources.xml への読み取りアクセス権 ● server.xml パスの global-web-application.xml への読み取りアクセス ● <OracleHome>/Apache/modplsql/conf/ plsql.conf への読み取りアクセス権
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> ● <OracleHome>/opmn/conf/opmn.xml への書き込みアクセス ● opmn.xml から取り込まれたパスの server.xml への書き込みアクセス権 ● 上記の設定ファイルに記載されている設定ファイルへの書き込みアクセス権 ● server.xml パスの data-sources.xml への書き込みアクセス権 ● server.xml パスの global-web-application.xml への書き込みアクセス権 ● <OracleHome>/Apache/modplsql/conf/ plsql.conf への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権

操作	要件
<p>ログの取得</p>	<p><OracleHome>/opmn/conf/opmn.xml への読み取りアクセス権 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権</p> <ul style="list-style-type: none"> • <OracleHome>/network/ log/agntsrvc.log • <OracleHome>/network/log/dbsnmp.log • <OracleHome>/network/log/nmicnf.log • <OracleHome>/network/log/*.nohup • <OracleHome>/webcache/logs/event_log • <OracleHome>/webcache/logs/access_log • <OracleHome>/dcm/logs/dcmctl_logs/log.xml • <OracleHome>/dcm/logs/emd_logs/log.xml • <OracleHome>/reports /logs/*.log • <OracleHome>/ldap/log/oidmon.log • <OracleHome>/opmn/logs/ons.log • <OracleHome>/opmn/logs/ipm.log • <OracleHome>/sysman/log/*.log • <OracleHome>/sysman/log/*.nohup

操作	要件
ログのクリア	<p><OracleHome>/opmn/conf/opmn.xml への削除アクセス権 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権</p> <ul style="list-style-type: none"> • <OracleHome>/network/ log/agntsrv.log • <OracleHome>/network/log/dbsnmp.log • <OracleHome>/network/log/nmicnf.log • <OracleHome>/network/log/*.nohup • <OracleHome>/webcache/logs/event_log • <OracleHome>/webcache/logs/access_log • <OracleHome>/dcm/logs/dcmctl_logs/log.xml • <OracleHome>/dcm/logs/emd_logs/log.xml • <OracleHome>/reports /logs/*.log • <OracleHome>/ldap/log/oidmon.log • <OracleHome>/opmn/logs/ons.log • <OracleHome>/opmn/logs/ipm.log • <OracleHome>/sysman/log/*.log • <OracleHome>/sysman/log/*.nohup

ERP/CRM : PeopleSoft 8.x

操作	要件
設定の取得	<ul style="list-style-type: none"> • <PSHOME>/peopletools.properties への読み取りアクセス権 (使用可能な場合) • <PSHOME>/appserv/psadmin への実行アクセス権 • <PSHOME>/appserv/<APP>/psappsrv.cfg への読み取りアクセス権
設定の更新	<ul style="list-style-type: none"> • <PSHOME>/appserv/<APP>/psappsrv.cfg への書き込みアクセス権 • <PSHOME>/appserv/psadmin -configure への実行アクセス権
サービスの開始 / 停止	<PSHOME>/appserv/psadmin への実行アクセス権

操作	要件
ログの取得	<PSHOME>/appserv/<APP>/LOGS ディレクトリ内の APPSRV*, TUXLOG*, *.TRACESQL, *.DMP への読み取りアクセス権
ログのクリア	<PSHOME>/appserv/<APP>/LOGS ディレクトリ内の APPSRV*, TUXLOG*, *.TRACESQL, *.DMP への削除アクセス権

ERP/CRM : SAP Enterprise Portals 6.x

操作	要件
設定の取得	次への読み取りアクセス権 <ul style="list-style-type: none"> • <EP_PATH>/datafile/data/pcd.properties • <J2E_PATH>/configtool/service.ini • <SAP_SERVICEHOME>/managers/settings/*.managers • <SAP_SERVICEHOME>/services/*/properties
設定の更新	次への書き込みアクセス権 <ul style="list-style-type: none"> • <EP_PATH>/datafile/data/pcd.properties • <SAP_SERVICEHOME>/managers/settings/*.managers • <SAP_SERVICEHOME>/services/*/properties
サービスの開始 / 停止	"World Wide Web Publishing Service" および "SAP J2EE Engine Alone" への net start/stop を行う権限
ログの取得	次への読み取りアクセス権 <ul style="list-style-type: none"> • <EP_PATH>/datafile/data/pcd.properties • <J2E_PATH>/configtool/service.ini • <SAP_SERVICEHOME>/managers/settings/*.managers • <SAP_SERVICEHOME>/services/*/properties <p>これらは、すべての SAP ログ・ファイル・タイプへのパスのリストのために必要 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権</p>
ログのクリア	SAP EP 設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権

ERP/CRM : SAP R/3 4.x

操作	要件
設定の取得	<SAPConfigDir>/*.PFL への読み取りアクセス権
設定の更新	<SAPConfigDir>/*.PFL への書き込みアクセス権
サービスの開始 / 停止	ユーザ定義スクリプトへの実行アクセス権
ログの取得	<ul style="list-style-type: none"> • <SAPConfigDir>/*.PFL への読み取りアクセス権 • 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの読み取りアクセス権
ログのクリア	<ul style="list-style-type: none"> • <SAPConfigDir>/*.PFL への読み取りアクセス権 • 上記の設定ファイルから動的に得られた各ログ・ファイルへの削除アクセス権

ERP/CRM : Siebel 7.x

操作	要件
設定の取得	<SIEBELHOME>siebsrvr/bin/srvrmgr への実行アクセス権
設定の更新	<SIEBELHOME>siebsrvr/bin/srvrmgr への実行アクセス権
サービスの開始 / 停止	<ul style="list-style-type: none"> • Windows の場合は net start/stop "Siebel Server [<enterprise>_<server>]" • UNIX の場合は <SIEBELHOME>/siebsrvr/bin ディレクトリ内の start_server / stop_server
ログの取得	SWEApp/log/ss*.log, <SIEBELHOME>/siebsrvr/log/*.log, <SIEBELHOME>/siebsrvr/bin ディレクトリ内の siebel_assert*, siebel_prefer*, siebel_crash* への読み取りアクセス権
ログのクリア	SWEApp/log/ss*.log, <SIEBELHOME>/siebsrvr/log/*.log, <SIEBELHOME>/siebsrvr/bin ディレクトリ内の siebel_assert*, siebel_prefer*, siebel_crash* への削除アクセス権

チューニング・エージェントのアンインストール

サーバからチューニング・エージェントを削除する方法は、チューニング・エージェントのインストール方法によって異なります。

チューニング・エージェントを CD からインストールした場合は、次の手順を実行します。

- ▶ [スタート] > [プログラム] > [Tuning Agent] > [Uninstall Tuning Agent Installation] を選択し、画面上の指示に従います。

コンソール・マシンからリモートで、またはコンソール・マシンからリモート・マシンにファイルをコピーすることによってチューニング・エージェントをインストールした場合は、次の手順を実行します。



- 1 チューニング・エージェントを停止します（コンソールの [設定] タブでサーバのアイコンをクリックし、[Stop Tuning Agent] ボタンをクリックします。操作の確認を求められたら、[はい] をクリックします）。
 - 2 ホスト・マシンで、該当する場所からチューニング・エージェントのファイルを削除します。
- ▶ Windows マシンの場合は、C:¥Mercury Interactive¥Tuning Agent¥agent ディレクトリを削除します。この場所にファイルがない場合は、PE_HOME 環境変数を調べればファイルの場所がわかります。その後、PE_HOME 環境変数を削除します。
 - ▶ UNIX マシンの場合は、/tmp/tuningagent ディレクトリを削除します。

索引

L

LD_LIBRARY_PATH 68

M

M_LROOT 68

MI リスナー 23

N

NT 管理者 8

O

Oracle73 68

P

PATH 68

S

SiteScope 12

U

UNIX

UI モードでのインストール 60

インストール・スクリプト 59

インストール・モード 60

環境の確認 59

コンソール・インストール 60

コンソール・モードでのインストール

60

システム・リソース 49

V

verify_generator 73, 74

VuGen スタンドアロン・インストール 10

W

WAN エミュレーション 12

あ

アンインストール 24, 66

い

インストール

UNIX 59

Windows 3

インストールの検証 73

インストールの種類

ローカル 8

か

カスタム・インストール 15, 22

環境変数 67

け

権限 69

こ

コンポーネント, 追加 77

コンポーネントの追加 27-29

さ

サンプルのセットアップ 37-43

し

診断

UNIX 用ハードウェア診断 57

Windows のハードウェアの要件 5

す

スワップ領域 55

ち

チューニング・エージェント

ローカルなインストール (UNIX) 78

索引

ローカルなインストール (Windows) 78
チューニング・エージェントのインストール
77
チューニング・エージェントのローカルなイ
ンストール
UNIX 78
Windows 78

と

動作環境
UNIX 48
Windows 4

は

ハードウェアの要件
Diagnostics, Windows 5
ハードウェア要件
診断, UNIX 57

ふ

ファイアウォール越しの監視 23
ファイル記述子 53
複数のプラットフォーム 59
プロセス・エントリ 51

ら

ライセンス管理者 (Windows) 31-36
情報の表示 31
トラブルシューティング 35
変更 34

ろ

ロード・ジェネレータ 10